熊本県文化財調査報告第77集

福原横穴墓群

1985

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告第77集

福原横穴墓群

1985

熊本県教育委員会

序　　文

本書は、県道北中島益城線道路改良工事に伴って実施した上益城郡益城町の「福原横穴墓群」に関する報告であります。

横穴墓はすでに半壊の状態ではありましたが、それらの形態の違いから変遷状態を知ることができ、また、出土人骨についても貴重な知見を得ることができました。

本書が、埋蔵文化財に対する認識と理解、さらに学術研究上の一助になれば幸いです。

調査にあたり、長崎大学医学部の諸先生、地元益城町の方々からの御協力を賜わりました。

ここに心からお礼を申し上げます。

昭和60年３月31日

熊本県教育長　伴　正善

例　言

(1) 本書は、熊本県教育委員会が昭和59年度に実施した、上益城郡益城町に所在する福原横穴墓群の発掘調査報告書である。

(2) 発掘調査は、熊本県土木部から依頼を受けて、昭和59年度県道北中島益城線道路改良工事に伴う事前調査として実施した。

(3) 発掘調査では、益城町教育委員会をはじめとする地元の方々や、関係各位の全面的な協力を得た。

(4) 遺構・遺物の実測および写真撮影は、髙木正文が行った。

(5) 人骨の調査は、長崎大学医学部解剖学第二教室（内藤芳篤教授）に依頼した。

(6) 本書の執筆は、Ⅰを緒方勉、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳを髙木が担当した。また、長崎大学医学部解剖学第二教室の松下孝幸・分部哲秋・中谷昭二の三氏からは、人骨についての玉稿をいただいた。

(7) 本書の編集は、熊本県教育庁文化課で行い、髙木が担当した。

本　文　目　次

Ⅰ　位置と環境……1
Ⅱ　調査の経過……3
Ⅲ　横穴墓と遺物……6
　　1号横穴墓……6
　　2号横穴墓……6
　　3号横穴墓……8
　　4号横穴墓……11
　　5号横穴墓……12
　　6号横穴墓……13
　　閉塞石……13
　　出土遺物……13
Ⅳ　まとめ……15
図　版……19
Ⅴ　熊本県益城町福原横穴墓群出土の古墳時代人骨
　　……松下孝幸・分部哲秋・中谷昭二（長崎大学）……29
　　はじめに……29
　　資　料……29
　　所　見……31
　　総　括……40
　　参考文献……41
図　版（人骨）……43

挿　図　目　次

第1図　福原横穴墓群位置図……2
第2図　福原横穴墓群周辺測量図……7
第3図　1号・2号横穴墓実測図……8
第4図　3号横穴墓実測図……9
第5図　4号横穴墓実測図……10
第6図　5号横穴墓実測図……11
第7図　6号横穴墓実測図……12
第8図　閉塞石実測図……13
第9図　須恵器（堤瓶）実測図……14
第10図　轡実測図……14
第11図　福原横穴墓群変遷図……16
図1　遺　跡……30
別図　福原横穴墓群配置図……はさみ込み

表　目　次

表1　人骨一覧……31
表2　下顎骨計測値……32

表３　上腕骨計測値……33
表４　上腕骨計測値（男性）……33
表５　上腕骨計測値（女性）……34
表６　上腕骨計測値（右）……34
表７　橈骨計測値……35
表８　尺骨計測値……35
表９　大腿骨主要計測値……36
表10　大腿骨計測値（男性、右）……36
表11　大腿骨計測値（女性、右）……37
表12　大腿骨主要計測値……37
表13　大腿骨主要計測値……38
表14　脛骨計測値……39
表15　脛骨計測値（男性、右）……39
表16　脛骨計測値……40

図　版　目　次

図版１　１）横穴墓群遠景
　　２）横穴墓群から見た平野と託麻原台地
図版２　１）発掘前の横穴墓群
　　２）発掘後の横穴墓群
図版３　１）１号横穴墓
　　２）２号横穴墓
図版４　１）３号横穴墓
　　２）４号横穴墓
図版５　１）５号・６号横穴墓
　　２）５号横穴墓
図版６　１）６号横穴墓
　　２）閉塞石
図版７　１）人骨再埋葬地の発掘前
　　２）同上の発掘後
図版８　１）横穴墓出土の須恵器（提瓶）破片
　　２）横穴墓出土の轡
人骨図版　下顎骨Ａ（上面）
　　下顎骨Ａ（正面）
　　上腕骨（Ａ・Ｂ・Ｅ・Ｄ・Ｃ）
　　大腿骨（Ａ・Ｂ）
　　大腿骨（Ｃ・Ｄ・Ｅ）
　　脛　骨（Ａ・Ｂ）
　　脛　骨（Ｃ・Ｄ・Ｅ）
　　橈　骨（Ａ・Ｂ・Ｃ）
　　尺　骨（Ｃ・Ｂ・Ａ）

Ⅰ　位置と環境

福原横穴墓群は行政区画のうえから熊本県上益城郡益城町大字福原字西鳥山に属する。ここへのルートは、熊本市の東に接する益城町木山を起点として、県道154号線（北中島―益城線）を南へ向けて２kmほど進むと福原集落に達する。そして福原を通り過ぎると、これまで平坦であった道も屈曲した坂道にかわる。二番目の大きく迂回するあたりが西鳥山で、横穴墓群はカーブの少し手前、道路左手（南側）の崖面に並んでいる。ここは丁度福原集落の上方にあたる。

福原横穴墓群の南１km余りのところには船野山（308ｍ）が、西南西３kmの上方には、肥後風土記逸文の朝来名ノ峯に比定されている朝来山（465ｍ）がある。横穴墓群の前方は水田面で託麻台地を望むことができる。

福原横穴墓群は標高約50ｍの崖面に並んでいるが、大正５年道路工事の際、人骨および須恵器（横瓮）が出土し、広く横穴墓群の存在が知られるに至った。昭和37年熊本県遺跡地図作成の際数回現地を訪れ、５～６穴の横穴墓を確認、出土遺物として横瓮１個が福田小学校に保管されていたが、小学校統合などもあってか、今では紛失している。

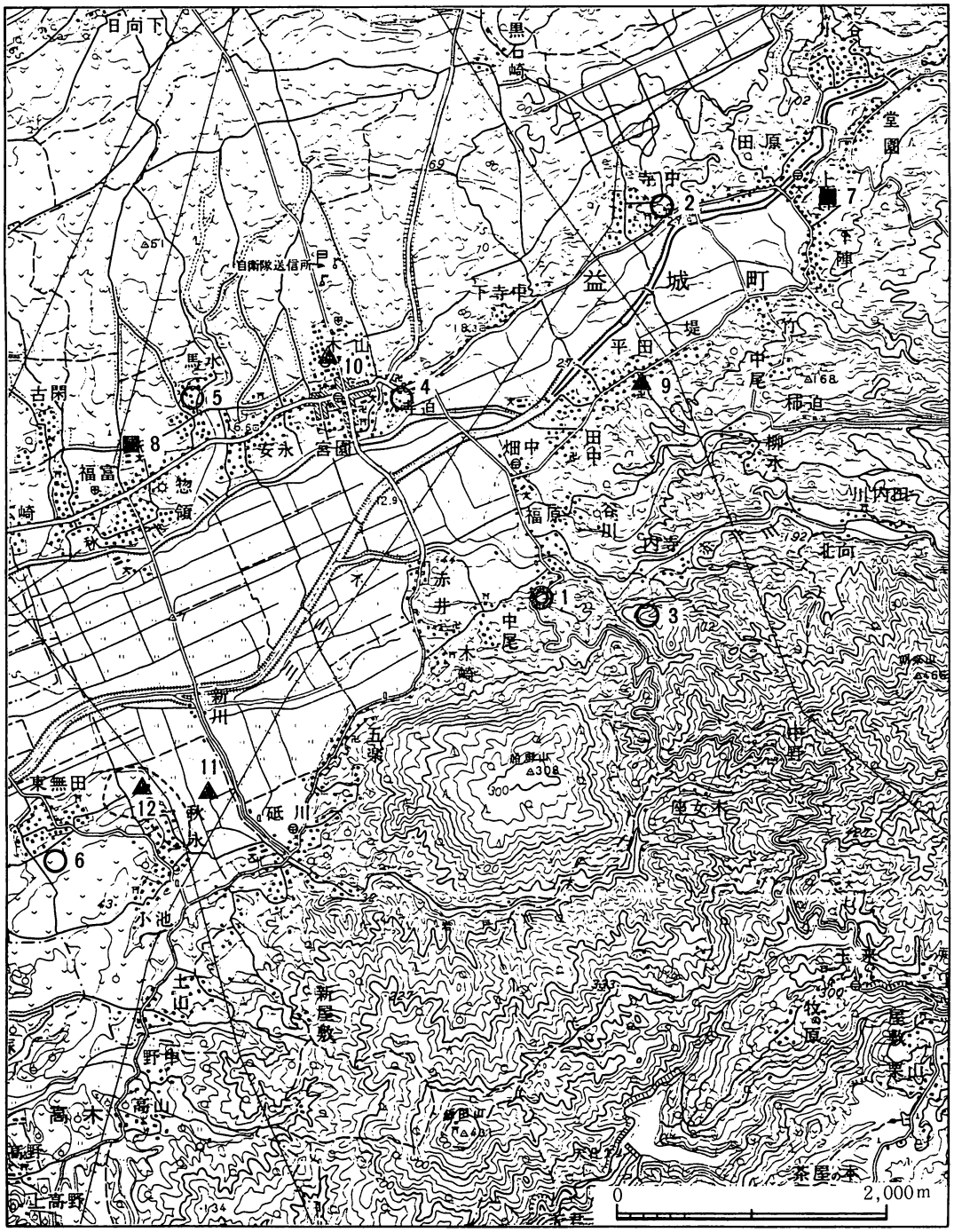
福原横穴墓群周辺の遺跡として、東１kmばかり距てた山には山岳寺院福田寺があるが、その同じ山中に「鬼の窟（おんいわや）」古墳がある。この古墳は朝来山同様、風土記逸文に土蜘蛛（ツチグモ）伝説としてあらわれる「鬼の窟」とみられるが、石室は南を向いて開口している。

福原横穴墓群の前面（北）は木山川のおりなす沖積平野であるが、手前の山裾には上方から上陣・下陣・平田などの集落が点在する。古代遺跡を上方から順次あげれば、上陣の山の斜面からはこれまで古墳時代とみられる箱式石棺２基が発見されており、ついで平田地区でも弥生時代後期の小型甕棺等が出土している。山裾には中世城の赤井城などがあるが、飯野地区には八反田の水田下から弥生時代前期の甕棺（支石あり）多数が瓦土採集の際出土している。

秋永、下原の一帯は弥生～古墳期にかけての大遺跡があり、昭和42年工場誘致の際、事前調査により多数の石棺、住居址が発見されている。さらに東無田集落の南の丘陵には横穴式石室墳の鬼塚があったが、この地区の圃場整備により埋没し、今では地名を残すのみとなっている。

沖積平野を隔てた向う側の託麻台地の裾では、寺中地区には上神内横穴墓群が集落裏の竹林の中にある。下って寺迫地区では畑中よりしばしば石棺の出土が伝えられているが、昭和57年夏には豪雨のため木山城北側の崖面近くから石棺が露出、中に銅鏡一面が副葬されていることが確認された。その後調査で地名をもとに「城ノ本古墳」と名付けられた。益城町役場近くの宮園ではこれまで地下げの際弥生時代の甕棺墓が、近くの馬水の鉄砂川西岸上の台地には狐塚古墳が、惣領集落の通称「高木さん」の一帯では、これまで多数の箱式石棺を出土している。

（緒方　勉）



第１図　福原横穴墓群位置図

1．**福原横穴墓群**　2．上陣内横穴墓群　3．鬼の窟古墳　4．城ノ本古墳　5．狐塚古墳　6．鬼塚古墳
7．上陳箱式石棺群　8．惣領箱式石棺群　9．平田遺跡（弥生甕棺）　10．宮園遺跡（弥生甕棺）
11．八反田遺跡（弥生甕棺・支石墓）　12．秋永遺跡（弥生～古墳期、住居址・箱式石棺）

II　調査の経過

県土木部から昭和59年度県道北中島益城線道路改良工事に伴い、福原横穴墓群の現在確認できる6基すべてが破壊される計画が出された。県文化課では保存の申入れをしたが、現地立ち合いの結果、地形状計画変更が不可能で、事故防止上、横穴墓群破壊は止むなしとの結論に達したので、発掘調査を実施し、記録として残すことになった。

発掘調査は昭和59年11月から同12月まで実施した。

調査と整理の組織は次のとおりである。（敬称略）

調査主体　熊本県教育委員会

総　　括　森　　一則（文化課長）

佐々木正則（文化課長補佐）

隈　　昭志（文化課主幹・文化財調査係長）

事務担当　柴田　和馬（文化課主幹・経理係長）

花田　隆一（文化課参事）

谷　喜美子（文化課主事）

西澤　八朗（文化課技師）

専門調査員　内藤　芳篤（長崎大学医学部教授）

松下　孝幸（長崎大学医学部講師）

調査担当　高木　正文（文化課学芸員）

調査協力　熊本県土木部道路建設課

熊本土木事務所

木下建設（木下　徹社長）

益城町教育委員会（松野国策・渡辺久美子）

益城町福原区長　上村光徳

益城町福原の米原佐吉・内田晃子・米原ミスエほか

調査参加　山崎源人・後藤末雄・中村れい子・竹勢　要・竹勢フユ子・後藤文子（以上益城町福原）

整理参加　分部哲秋・中谷昭二（以上長崎大学医学部）・緒方　勉・高村恭子・佐藤淳子・松原明美・中村絹子（以上文化課）ほか

調査日誌抄

昭和59年

7月9日（月）晴

隈昭志・緒方勉の二名現場立ち合い。熊本土木事務所の説明を受ける。工事変更不可能であるので発掘調査を行うことに決定。

11月16日（金）晴

隈・西澤八朗と熊本土木事務所の小野氏の三名で調査方法等打ち合わせ。

11月22日（水）晴

調査担当の高木正文現場確認。西澤と益城町教育委員会(松野国策・渡辺久美子)、熊本土木事務所、木下建設も立ち合い、調査と工事の日程を打ち会わせ。

11月26日（月）晴

発掘調査資材を県文化財収蔵庫から福原区長上村光徳氏宅まで運ぶ。

11月27日（火）晴時々曇

今日から地元の人々に手伝ってもらい発掘調査を開始。まず1号墓と2号墓を発掘。いずれも奥壁近くが残るのみ。出土遺物なし。発掘前や発掘後の状態の写真撮影も併行して行なう。

11月28日（水）晴

1号墓と2号墓の実測。3号墓と4号墓の発掘と写真撮影。床面の土は篩(フルイ)にかけたが遺物は発見されず。3号墓の壁面の一部に赤色顔料を塗った痕跡あり、また4号墓の通路奥の土にも赤色顔料の付着が認められる。

11月29日（木）晴

3号墓の実測を始める。5号墓と6号墓の発掘。5号墓は最も残りが良かったが出土遺物なし。6号は奥壁近くが残るのみ。

11月30日（金）晴

3号墓の続きを実測。6号墓の東隣に横穴墓残存の有無を調査したところ、ないことがわかった。福田小学校跡地に福原横穴墓群の閉塞石が持って行かれているというので見に行ったところ、安山岩製の閉塞石1個が確認された。

12月4日（火）晴

4号墓写真撮影と実測。

12月7日（金）晴

5号墓の写真撮影と実測。見学者の話で昭和19年に現地調査よりも西方で防空壕を掘った際横穴墓が見つかり、刀や轡が出土したことがわかった。

12月10日（月）曇時々晴のち雨

6号横穴墓の写真撮影と実測。横穴墓群のある位置の遠景写真撮影も行う。

12月11日（火）曇時々晴

大正５年、道路工事のため現調査中の横穴墓が 発見され削られ た際に出土した人骨を再埋葬したという地点を発掘。人骨数体分と轡１点、須恵器破片１点が出土。

12月12日（水）曇時々晴

横穴墓群の配置状態を測量。隈昭志調査を視察。

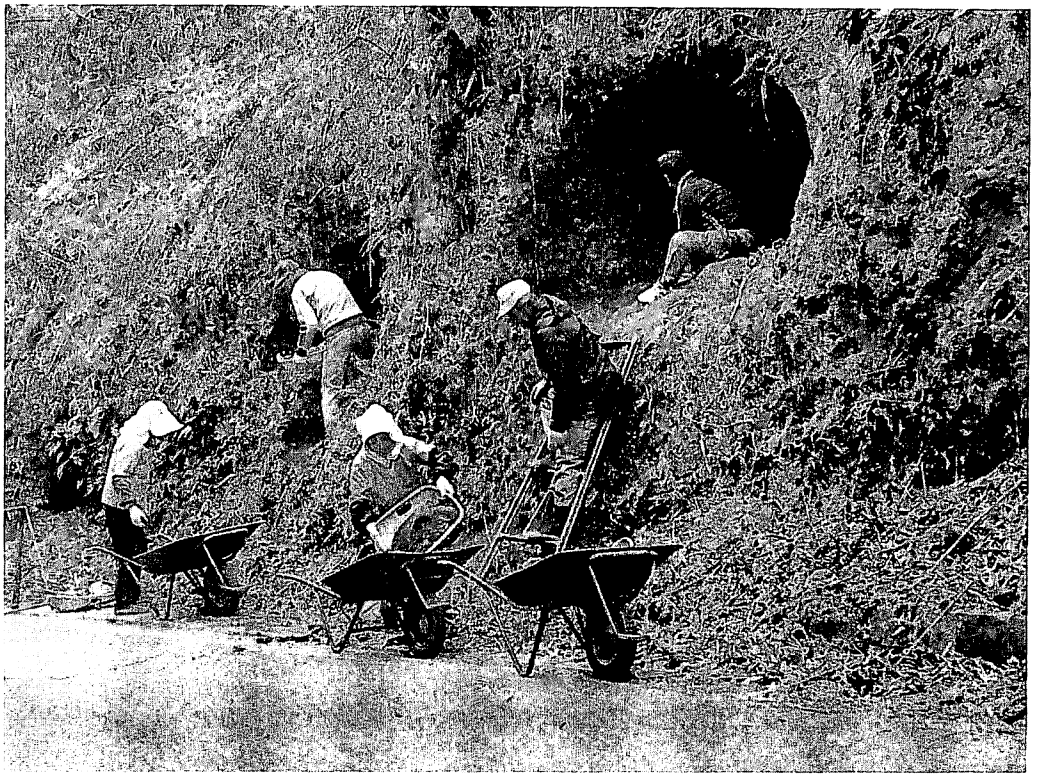
12月13日（木）晴時々曇

昨日の続きの測量。福田小学校跡地の閉塞石の発掘と実測。

12月20日（木）曇時々晴

調査資材を福原区長の上村氏宅から熊本県文化財収蔵庫へ運んだ。

（高木正文）



発掘調査風景

III　横穴墓と遺物

福原横穴墓群は熊本県上益城郡益城町大字福原字鳥山に所在した。

益城町の中心街から御船町七滝へと通じる道路のうち、平野部から山地に登りかかったところの西鳥山の北西面に凝灰岩の露出した所があり、そこに６基の横穴墓が確認できた。

横穴墓のあった所は標高47～49ｍで、そこからは熊本平野を一望することができ、直下には福原の集落がある。

横穴墓に関する地元の人達の話を総合すると横穴墓は大正５年の道路工事中に発見された。現存する６基以外に、削られて消滅した横穴墓や、やや下方にあって天井部が陥没した横穴墓もあったといい、その他残存した横穴墓の西端のものよりさらに西方30ｍ程の所に昭和19年に防空壕を掘った際にも発見されているので、もとは10基以上の群から成っていたものと考えられる。

調査時、道路に面した崖面の40ｍの範囲に６基の横穴墓があったが、これを西側から番号をつけて順に１～６号横穴墓とした。１号墓と２号墓は20ｍ、２号墓と３号墓は11ｍ離れていたが、３号墓から６号墓までは３ｍ間隔で扇形に並んでいた。

１号横穴墓

主軸方向はＮ15°Ｗで、北北西に開口していた。

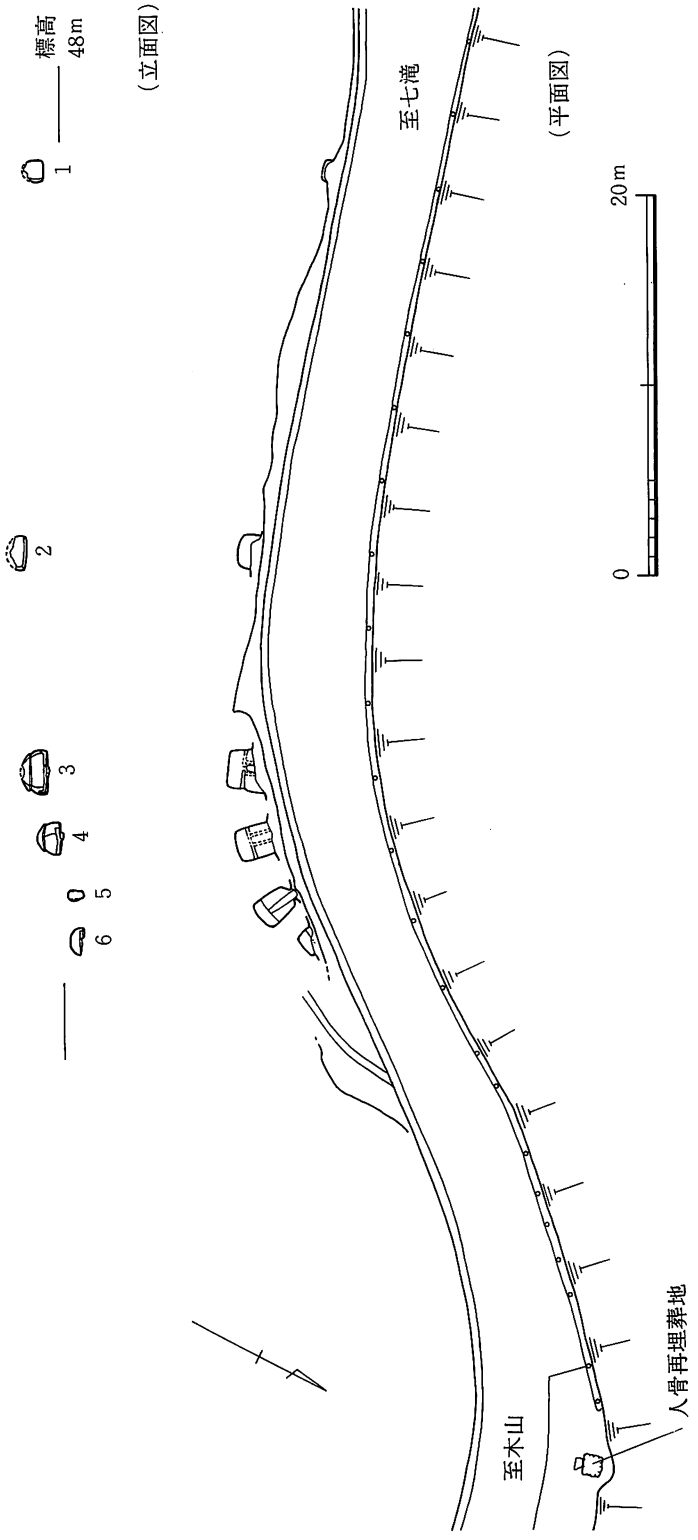
道路工事で削られて、わずかに奥壁付近が残るだけであった。残存していた部分の奥行きは60cmで、最大幅128cm、奥壁幅104cm、最大高111cmを測った。平面形は胴張りで、やや隅丸ぎみであった。奥壁の曲がり具合から考えると天井はドーム形を呈していたものとみられる。

２号横穴墓

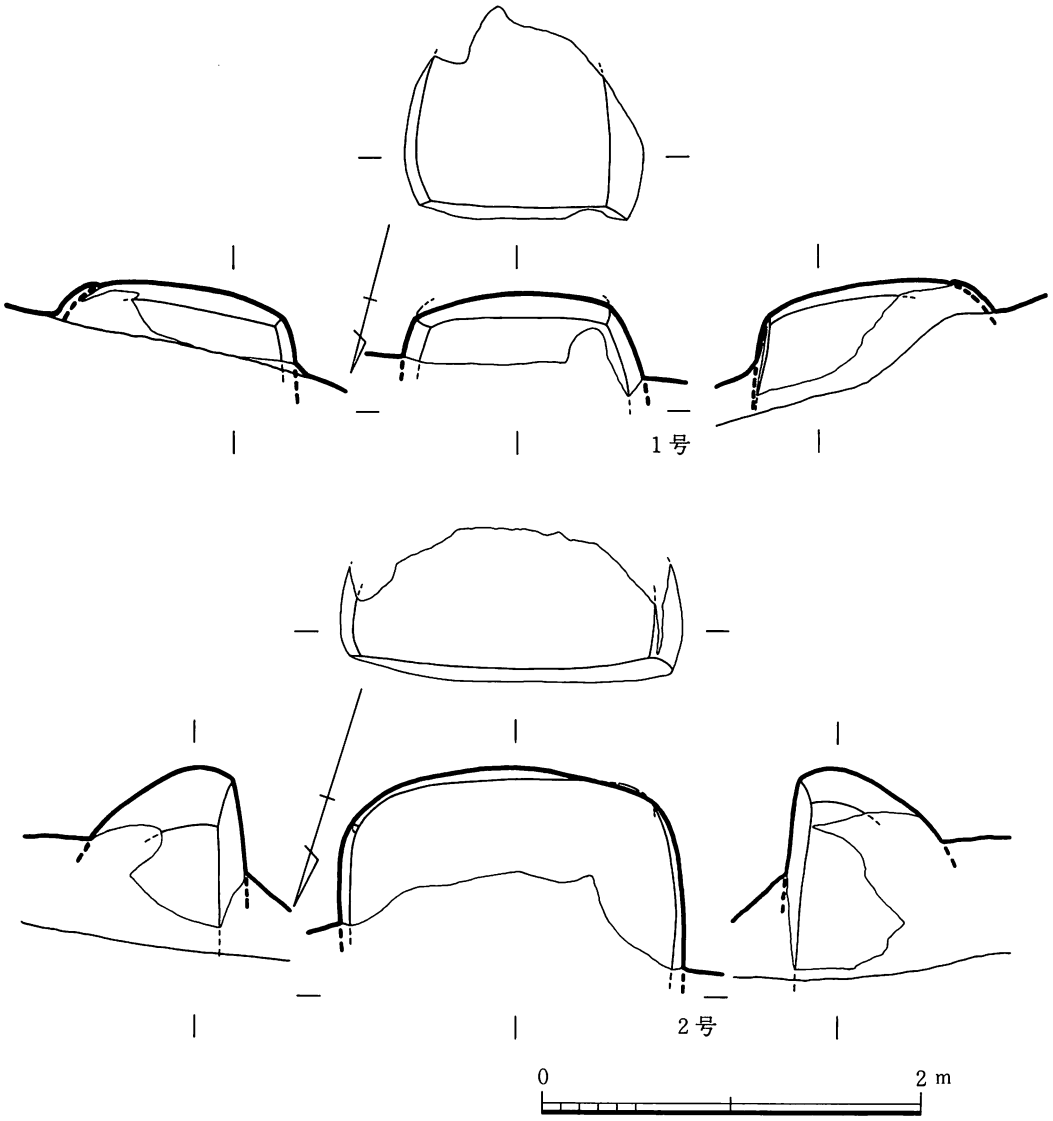
主軸方向はＮ17°Ｗで、北北西に開口し、本横穴墓群で最高所に位置していた。

この横穴墓も１号墓と同じく、削られて奥壁付近が残るだけであった。現存部の奥行きは106cmを測った。最大幅は182cm、奥壁幅160cmであったが、隅丸であったので、実際は奥に向かって幅広になる形態の横穴墓とみられる。

床面の残存部から、屍床の仕切はなかったものと考えられる。現存部の最大高は81cmで、奥壁の状態からみると天井の低い横穴墓であったと考えられる。



第 2 図　福原横穴墓群周辺測量図



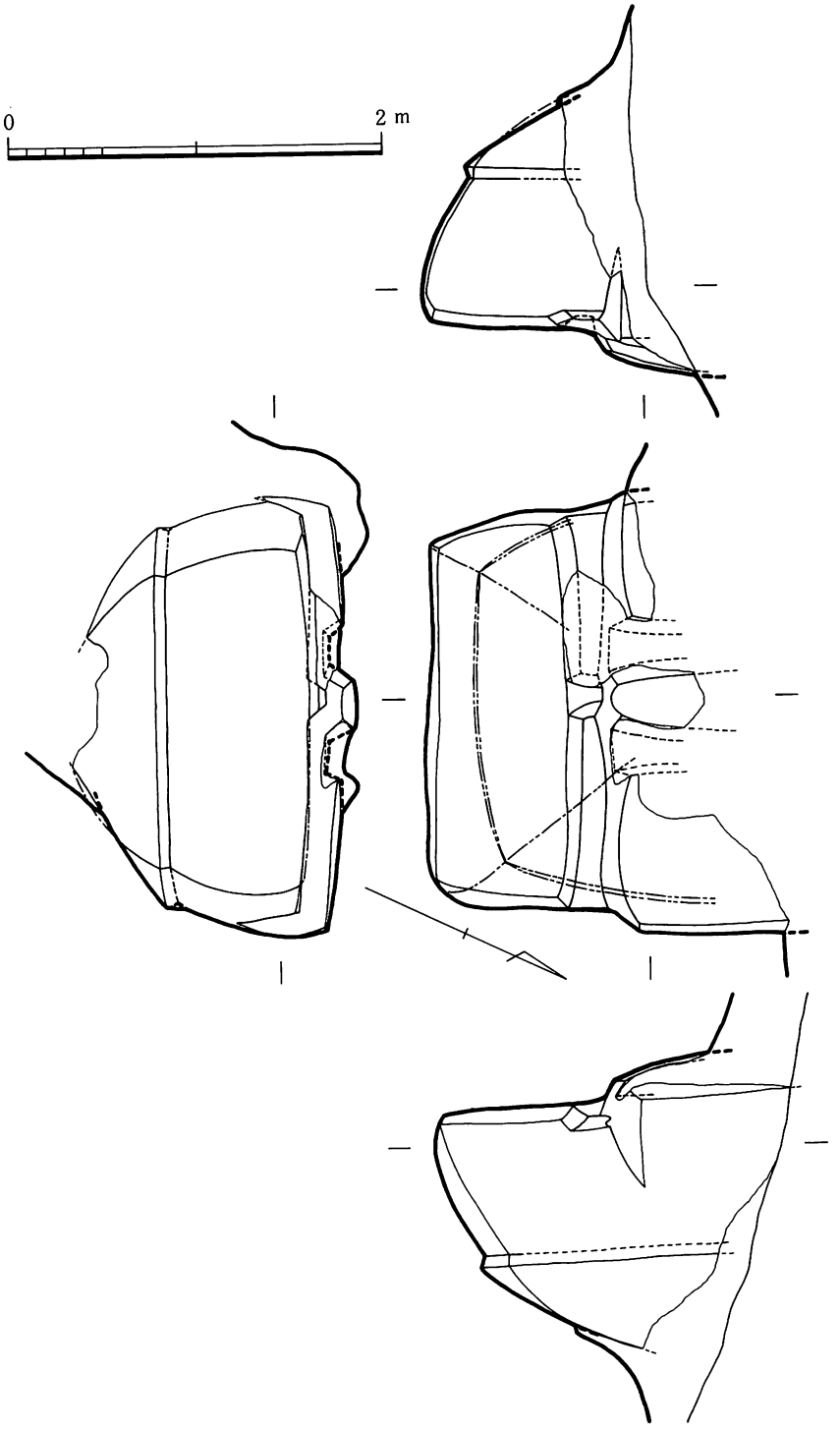
第3図　1号・2号横穴墓実測図

3号横穴墓

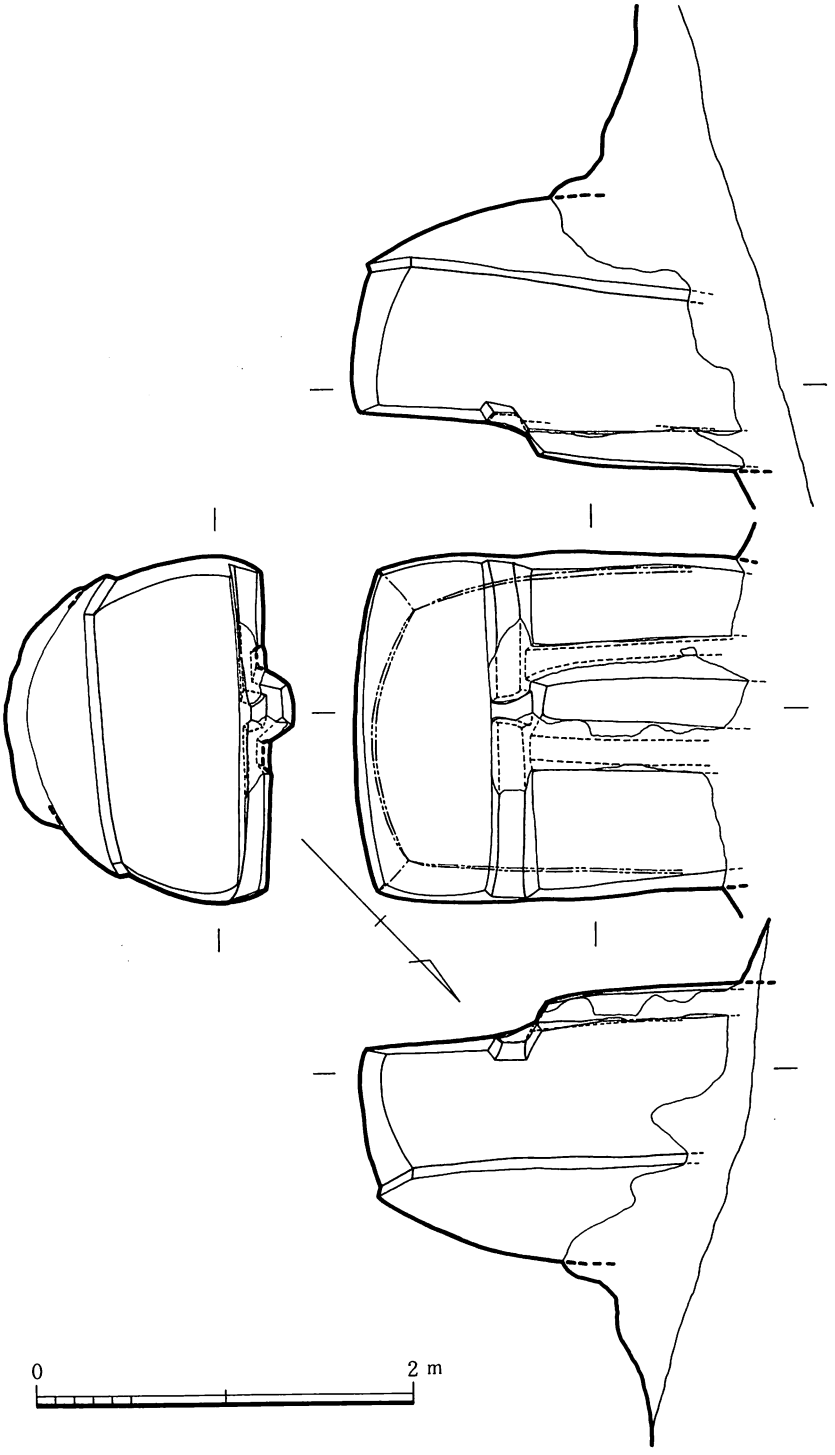
3号墓の主軸方向はN24°Wで、北西に開口していた。

この横穴墓はこの群の中では規模の大きな横穴墓で、玄室の半分程が残っていた。残存部の奥行きは193cm、最大幅238cm、奥壁幅186cmで、高さは158cmを測った。

中央に通路を設け、その左右と奥に屍床を配置したいわゆる「コ」字形屍床の横穴墓で、左右の屍床面は通路より10cm程高く、奥屍床はさらにそれより10cm程高く造られていた。右屍床面の幅は63cmであったが、左屍床面の幅は81cmで、やや不均衡であった。奥屍床面は幅71cm、



第 4 図　3 号横穴墓実測図



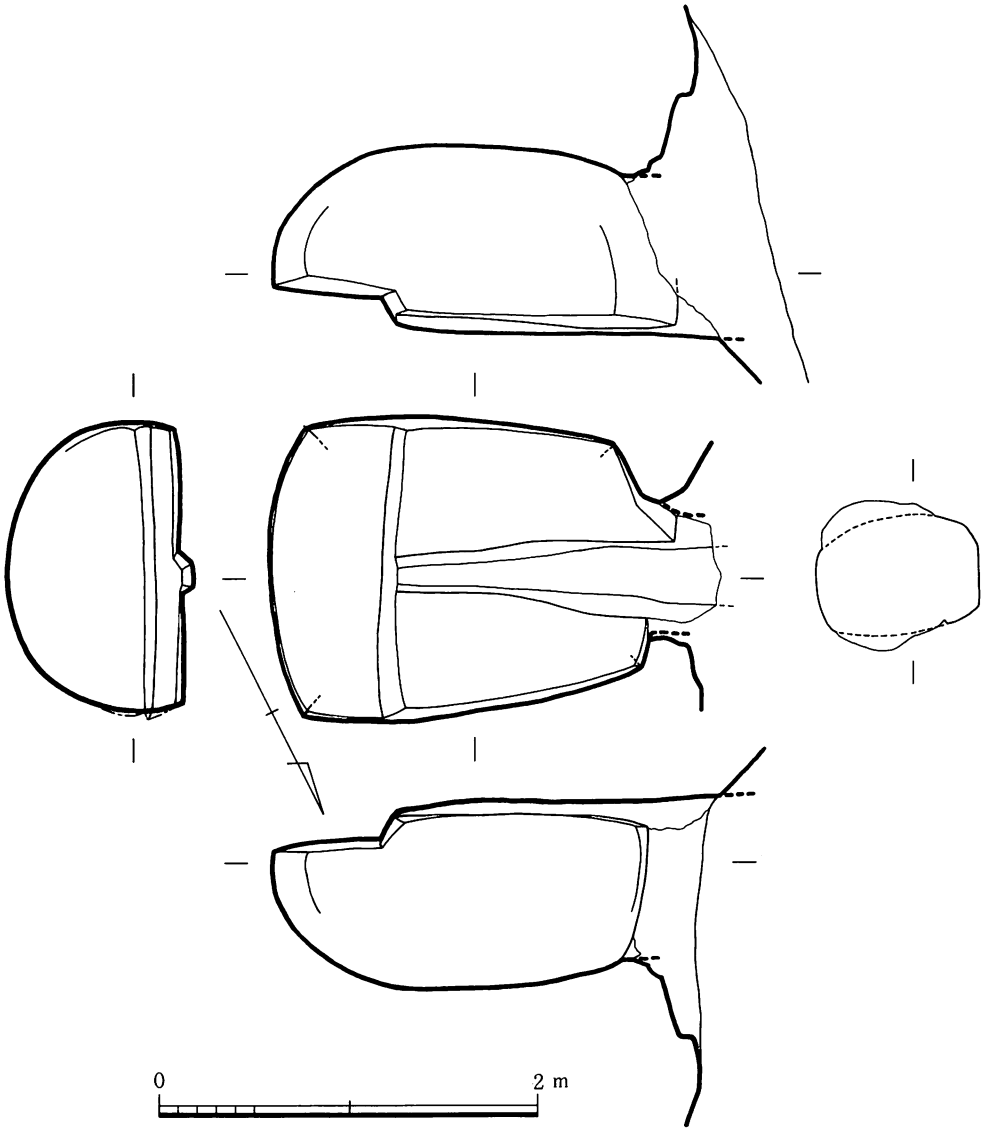
第５図　４号横穴墓実測図

長さ200cmで、仕切りの中央部には排水の溝が設けられていた。奥の仕切りの前面両端の側壁に段があるのは、ゴンドラ形仕切りの名残りであろうか。天井部は寄せ棟の家形で、軒先部分はやや崩れていたが、段をつけて表現していた。天井部の中央は壊れていたが、妻入りに棟が造られていたものと考えられる。

岩質が良くないので壁面の剝落が著しいが、左壁面の一部に赤色顔料の塗付が認められた。

4号横穴墓

主軸方向はN45°Wで、北西に開口していた。



第6図　5号横穴墓実測図

3号墓と同じく玄室の前部が削られていたが、半分以上は残っていた。残存部の奥行きは208cmで、最大幅182cm、奥壁幅168cm、高さ145cmであった。

平面形は長方形に近く、3号墓と同様「コ」字形に仕切られていた。左・右屍床は通路よりも15cm程高く、奥屍床はさらに10cm程高く造られていた。この横穴墓も中軸がやや右に片寄っており、右屍床面の幅は40cmしかないが、左屍床面の幅は62cmあった。長さは残りのよい右屍床から112cm以上であったことがわかる。奥屍床面は幅69cm、長さ176cmを測り、仕切りの中央には排水の溝が造られていた。

天井部は段をつけた軒先の表現はみられたが棟の表現はなく、軒先より上はドーム形になっていた。

通路の奥部に赤色顔料の付着した土があったが、壁面には塗られた痕跡を認めることができなかった。

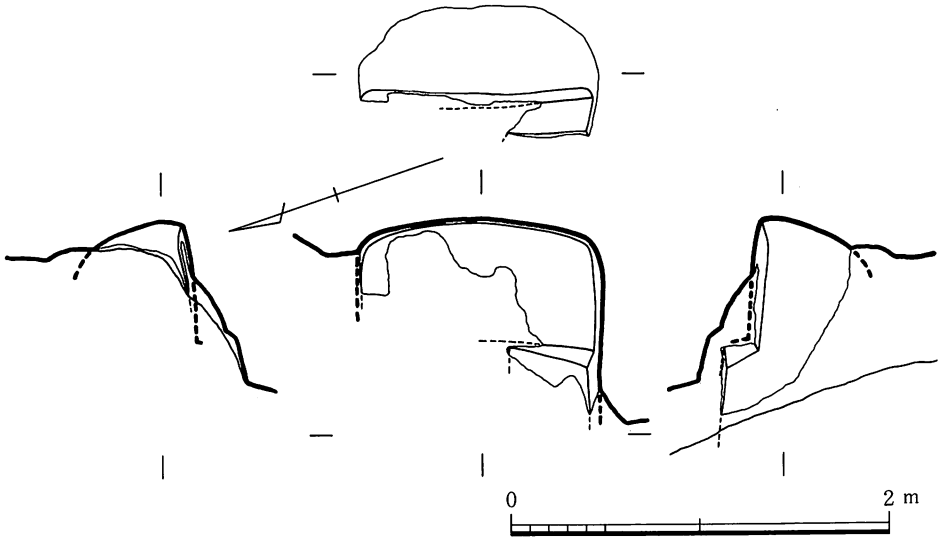
5号横穴墓

この群で最も残りの良かった横穴墓で、主軸方向はN63°Wを測り、西北西に開口していた。

羨門は崩れていたが、復原すると幅約60cm、高さ85cmであったと考えられた。

玄室の平面形は、やや胴張りの長方形で、入口側幅116cm、最大幅160cm、奥壁幅152cm、奥行き213cmを測った。また通路から天井までの高さは98cmであった。

屍床は「コ」字形に配置されていたが、床面の造りがやや雑で、仕切りはなかった。通路と



第7図　6号横穴墓実測図

左・右屍床との差は５cm程の段をつけて区別していた。奥屍床は左・右屍床よりも10cm程高く造られていた。左・右屍床は入口側が狭く、奥が広くなっていたが、その最大値をとれば、右屍床面は幅66cm、長さ148cm、左屍床面は幅61cm、長さ133cm、奥屍床床面は幅58cm、長さ154cmであった。

天井部はドーム形を呈していた。

６号横穴墓

主軸方向はＮ72°Ｗで、西北西に開口していた。

奥の部分が残るだけであったが、５号墓と類似する形態であったことがわかった。残存部の奥行き103cm、幅129cm、高さ69cmを測り、５号墓よりやや小型であった。

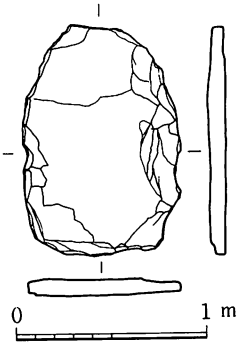
平面形は隅丸の長方形で、屍床は段差のみで表現していた。残存部から、右屍床は幅42cmで、奥屍床は右屍床より15cm程高く、幅60cm、長さ125cmであったことがわかった。

天井はドーム形であったと考えられた。

閉塞石

大正５年に横穴墓が発見された際出土した閉塞石が、福田小学校の近くに持っていかれていると地元の人から聞いたので、調査したところ、福田小学校跡地の脇の忠霊塔の横に板碑などと共に立てられていた。以前は数枚あったというが、現在は１枚だけ残っていた。

安山岩製割石の閉塞石で、最大幅166cm、高さ123cm、厚さ９cmを測る。上方は丸みを持ち、下端は直線に近い。



第８図　閉塞石実測図

出土遺物

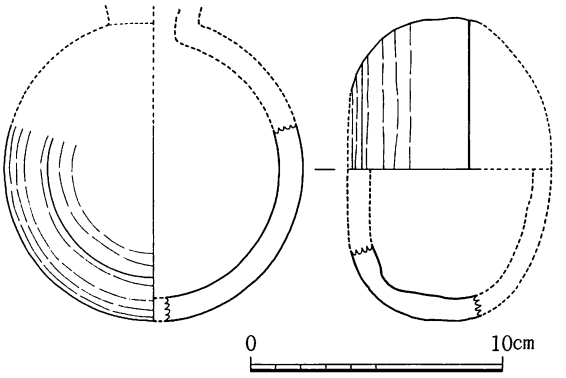
大正５年の道路工事の際、横穴墓から出土した須恵器など10数点が福田小学校に保管されていたというが、現在は行方不明である。工事の際に発見された人骨は石炭缶に入れて再埋葬されたというので発掘したところ、数体分が検出された。これらの人骨については長崎大学医学部に鑑定を依頼したので、本書に収録された結果を見られたい。

再埋葬された人骨と共に須恵器の破片１点と轡１点も検出された。

須恵器（第９図）は提瓶の破片と考えられ、復原すると胴部最大径12.0cmで、厚みは8.0cm

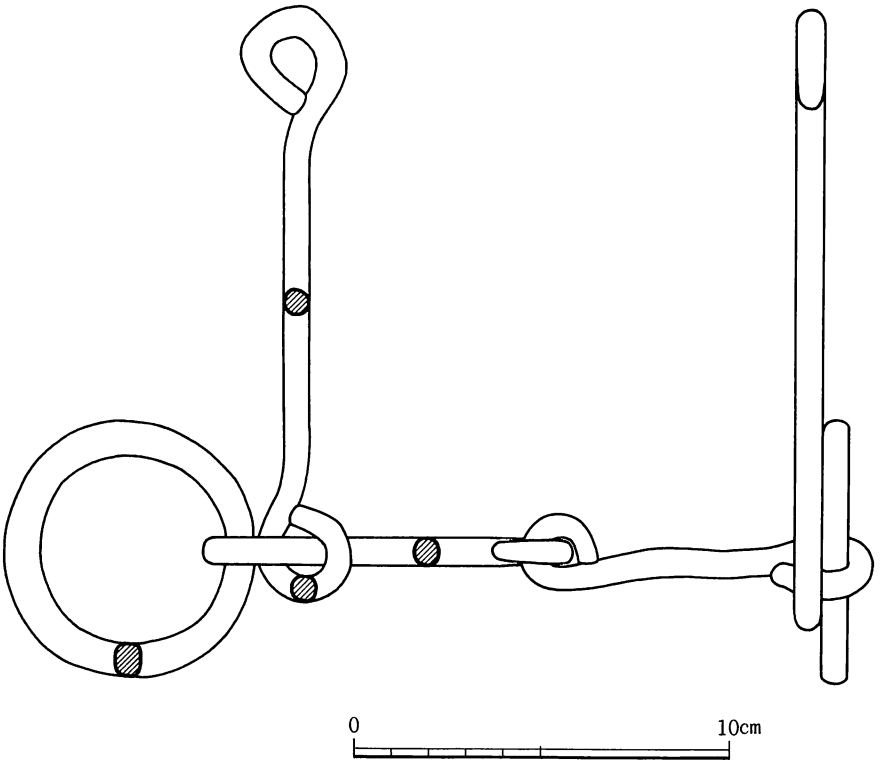
程度であったとみられる。

轡（10図）は単純な形態である。鏡板は円環で、一方は外径6.6×6.7㎝、他方は外径6.9×6.9㎝を測る。鏡板に衝が連結する。衝は二連式で、連結部は環をなし、衝の全長は17.8㎝を測る。引手は衝両端に連結する。引手の連結部と先端部は環をなす。引手の長さは一方が15.6㎝、他方が16.3㎝を測る。



第9図　須恵器（堤瓶）実測図

このほか、1号横穴墓の西方30m程のところで昭和19年に発見された横穴墓からも轡や柄の付いた刀など数点が出土したというが、現在は行方がはっきりしない。　（高木正文）



第10図　轡実測図

Ⅳ　まとめ

福原横穴墓群は調査により６基を確認できたが、本来は10基以上の群を成していたものと考えられる。

残存した遺物は須恵器の提瓶の胴部破片１点と轡１点のみで、どの横穴墓から出土したのか不明であるので、遺物から横穴墓の築造時期を判定するのは難しい。

残存した６基の横穴墓は大きく削られて、残存状態はよくなかったが、形態と規模において、すべてが特徴をもっていた。

特に並んで造られている３号墓～６号墓においてはその違いが明白である。

すなわち、平面形において、３号墓は台形に近い長方形、４号墓は長方形、５号墓は胴張りの長方形で、奥が広くなっている。６号墓は５号墓に類似するが隅丸になっている。

屍床の配置はいずれも「コ」字形であるが、３号墓と４号墓は仕切りがあり、５号基と６号墓は仕切りがなく、段差をつけたのみである。

天井部の形態を見ると、３号墓は軒と棟を表現した寄せ棟の家形で、恐らく妻入りであったと考えられ、４号墓は家形とドーム形の中間的な形態で、軒先の表現はあるが棟の表現がなく、ドーム形に近い。５号墓はドーム形で、６号墓もドーム形であったと考えられる。

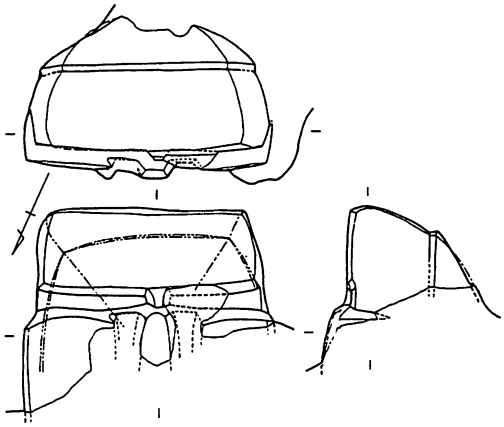
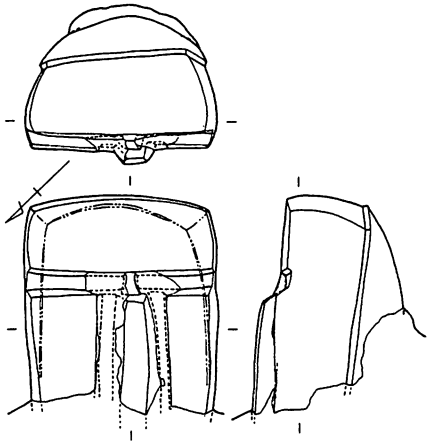
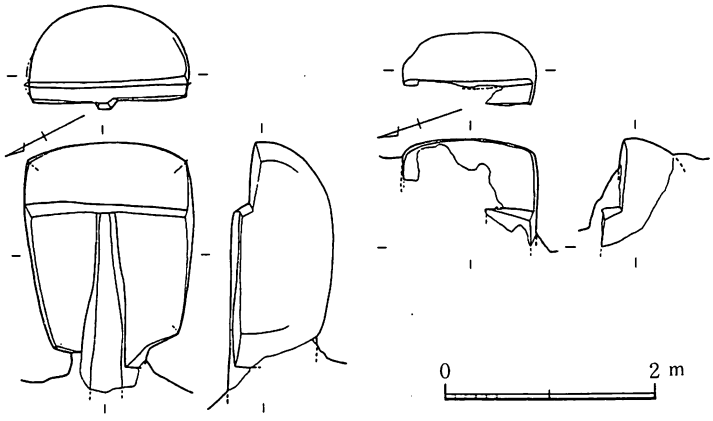
玄室の最大幅で横穴墓の規模を比較すると、３号墓は238cm、４号墓は182cm、５号墓は160cm、６号墓は129cmで、規模の大きな３号墓と規模の小さな６号墓の間に順序よく４号墓と５号墓がおさまっている。

これらの同一横穴墓群内における形態や規模の違いは、横穴墓を造った人々の意識の変化を反映しているものとみられ、それが造られた時期差を示しているものと考えられる。とすれば３号墓から順に６号墓へと変遷するか、あるいはその逆のどちらかである。

熊本県内に分布する横穴墓群の個々について、立地などから築造順序を想定すると、ほぼ羨門部は正面観が方形のものからアーチ形のものへと変化し、天井部は家形のものからドーム形へと変化する[(1)]ことがわかってきた。また、新しい時期の横穴墓は簡略化され、小型化する[(2)]こともわかった。

以上の知見から福原横穴墓群をみると、３号墓→４号墓→５号墓→６号墓の順で造られたと考えることができる。それらはこの近くに定住していたある一族の数世代に渡る墳墓であるとみてよい。

最後にこの横穴墓群で考えた横穴墓の変遷を３期に区切って提示し、今後の研究の進展に期待したい。すなわち３号墓を福原Ⅰ期、４号墓を福原Ⅱ期、５号墓と６号墓を福原Ⅲ期として

	横穴墓図	特徴
福原Ⅰ期		天井部 ・家形 （軒と棟あり） 平面形 ・長方形 ・仕切りのある 「コ」字形屍床
福原Ⅱ期		天井部 ・家形の退化した ドーム形 （軒あり） 平面形 ・長方形 ・仕切りのある 「コ」字形屍床
福原Ⅲ期		天井部 ・ドーム形 平面形 ・仕切りのない 「コ」字形屍床

第11図　福原横穴墓群変遷図

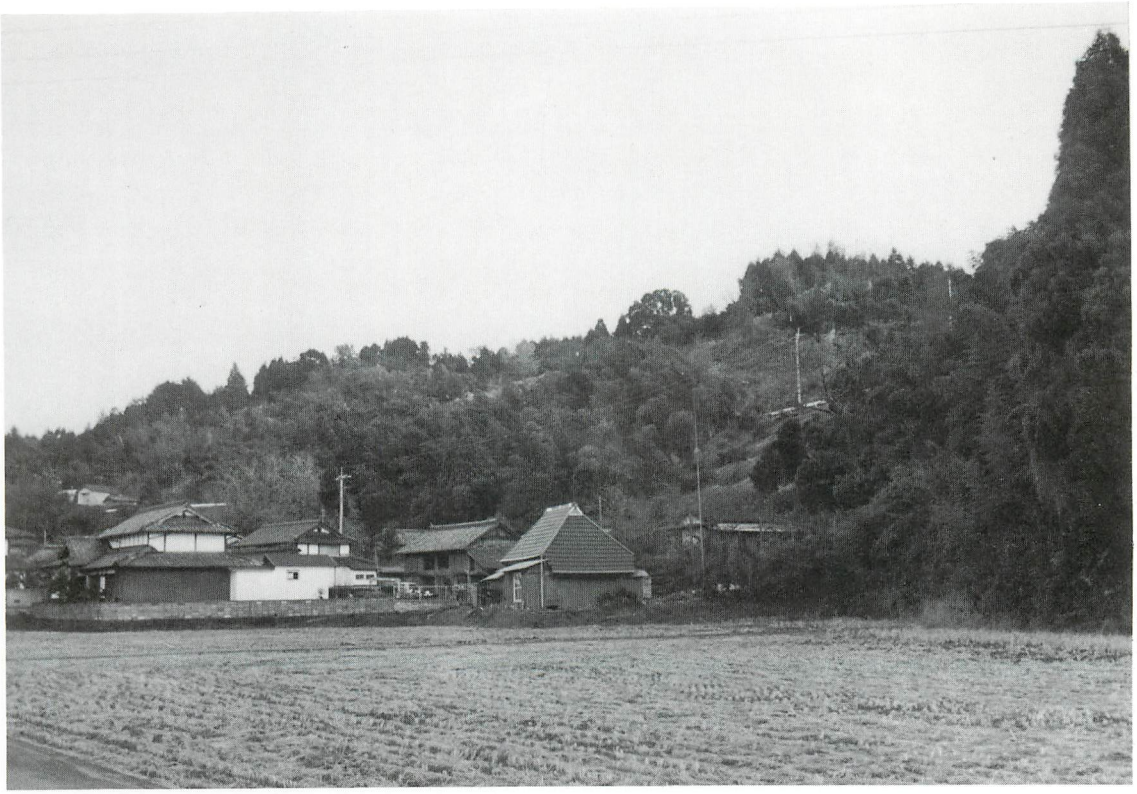
おこう。1号墓と2号墓はやや形態が異なるが、Ⅲ期に造られたと考えておく。各時期の年代については、遺物との関係が不明であるので明言をさけておくが、この群が6世紀後半から7世紀末の間に造られたことはまちがいないのであろう。なお、益城町大字寺中字上神内にある上神内横穴墓群は20基程度確認されているが、この中には福原Ⅰ期の横穴墓よりも古い形態と考えられる横穴墓があることを付記しておきたい。

（高木正文）

(1)高木正文「阿蘇外輪山上の城山横穴群」『えとのす』第22号　昭和58年（1983）

(2)乙益重隆・高木正文「古城横穴墓群」『隈本古城史』熊本県立第一高等学校　昭和59年（1984）

図　　版



1）横穴墓群遠景（西から、福原集落の上方が横穴墓群）

2）横穴墓群から見た平野と託麻原台地（南から）

図版 2

1）発掘前の横穴墓群（西から）

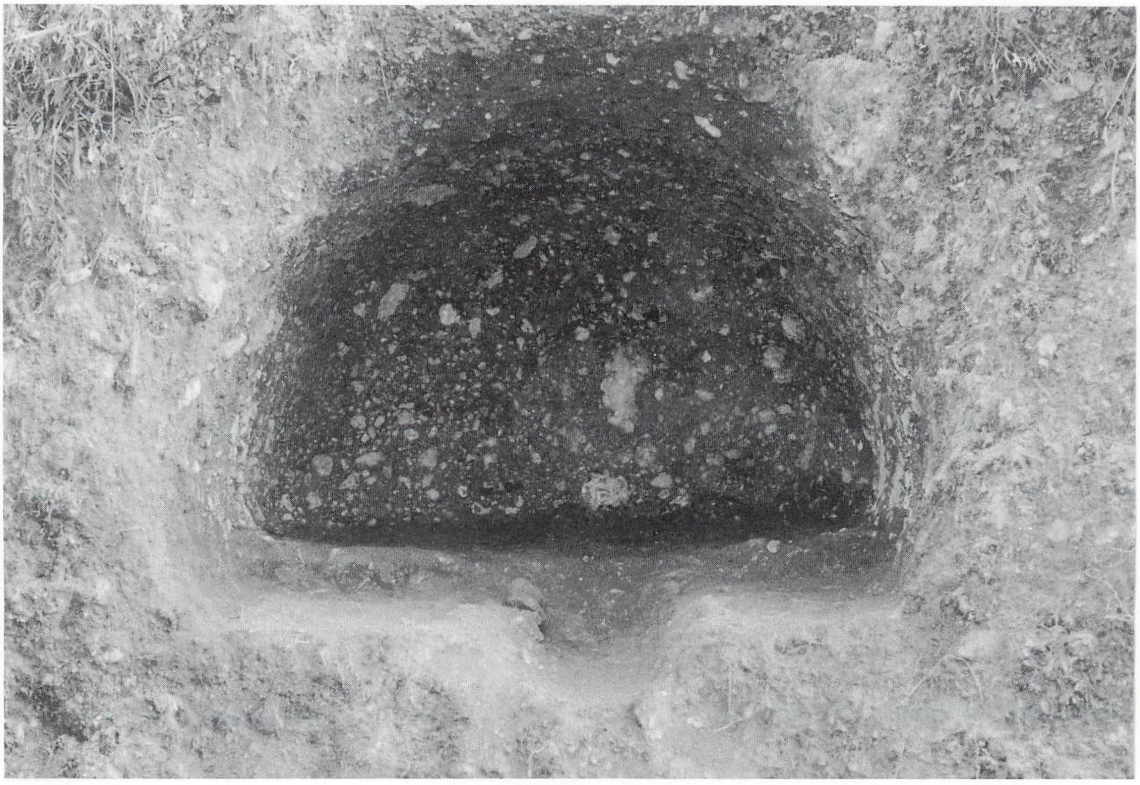
2）発掘後の横穴墓群（西から）

1） 1号横穴墓

2） 2号横穴墓

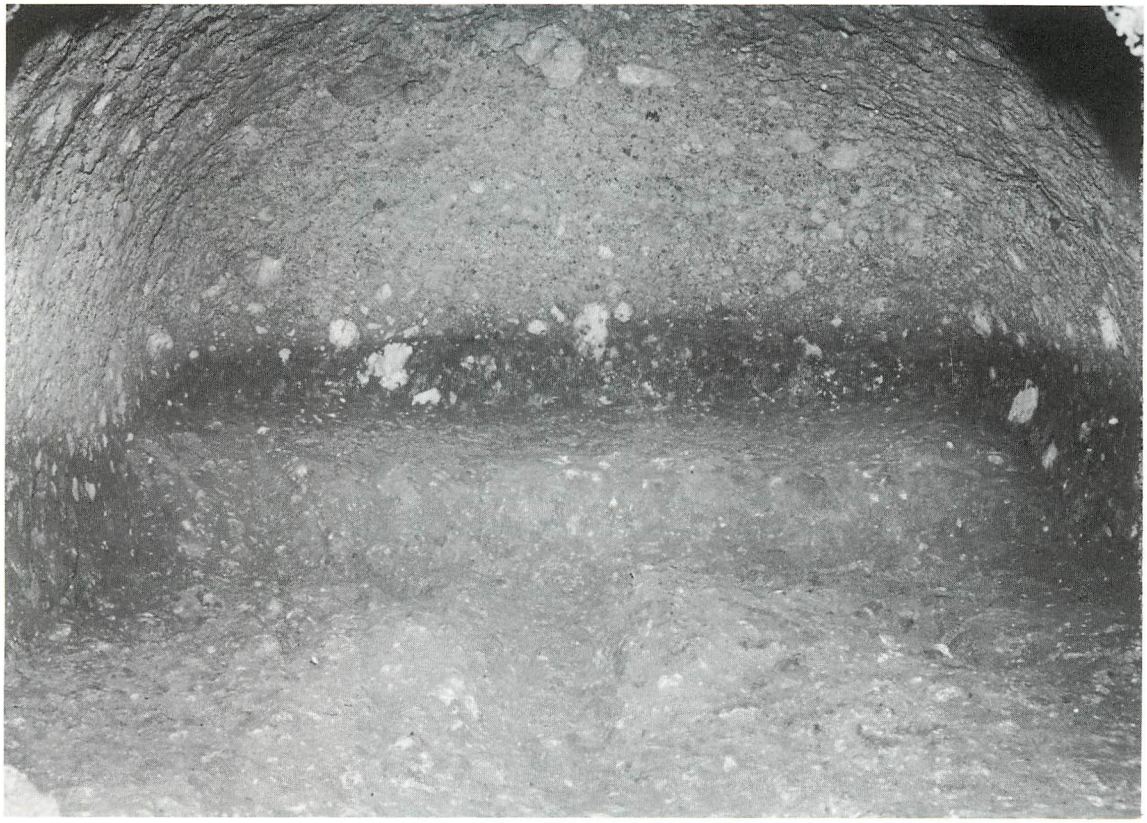
図版 4

1） 3 号横穴墓



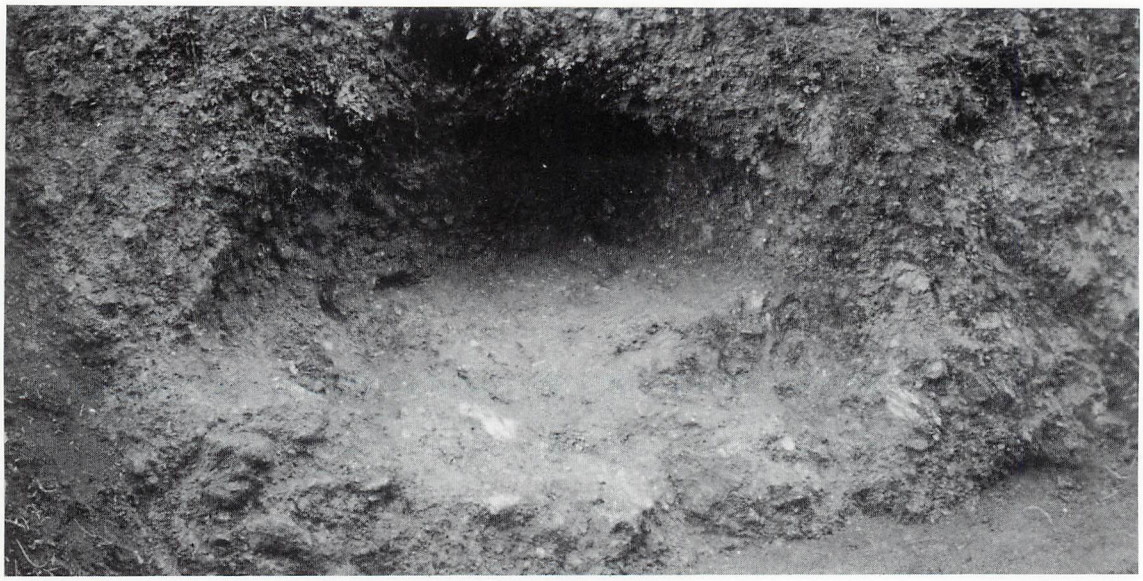
2） 4 号横穴墓

1） 5号・6号横穴墓（右：5号、左：6号）



2） 5号横穴墓（玄室内）

図版 6



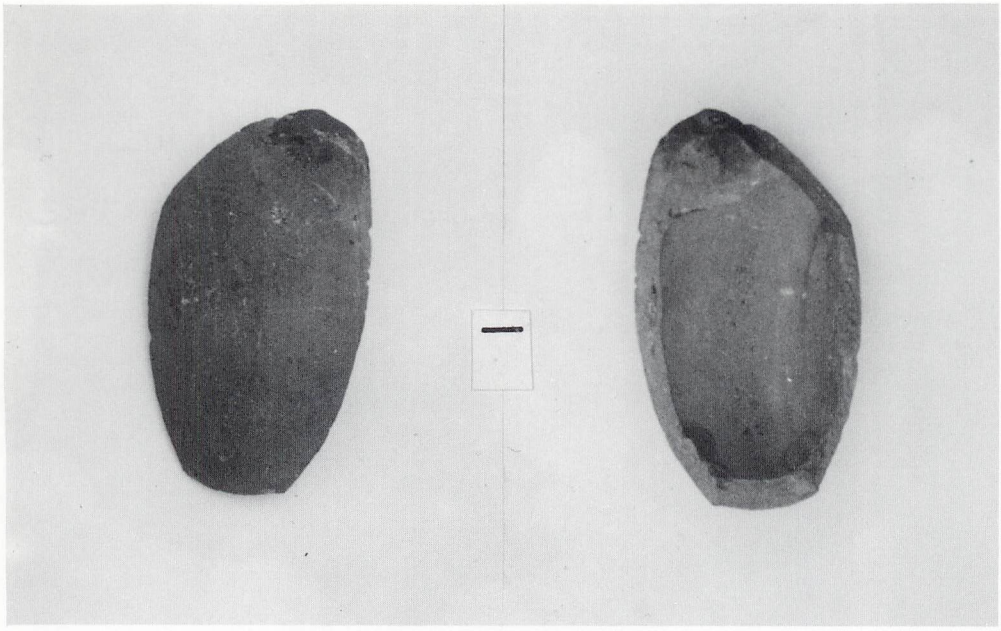
1） 6 号横穴墓

2）閉塞石

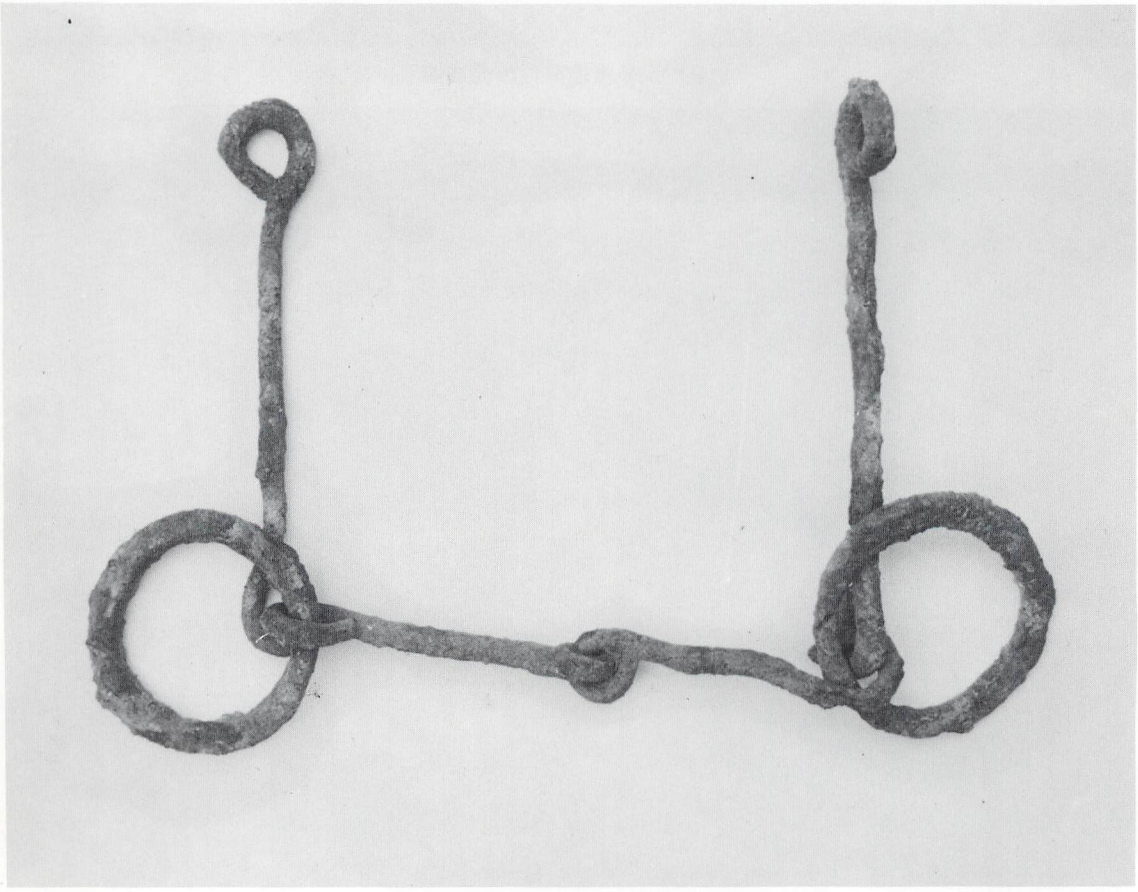
1）人骨再埋葬地の発掘前

2）同上の発掘後（現状）

図版 8



1）横穴墓出土の須恵器（提瓶）破片



2）横穴墓出土の轡

V　熊本県益城町福原横穴墓群出土の古墳時代人骨

松下孝幸*・分部哲秋*・中谷昭二*

はじめに

熊本県上益城郡益城町大字福原に所在した横穴墓群は、大正年間に行われた道路工事によって、そのうちの数基が破壊された。その際出土した人骨は１ヶ所に再埋葬されたが、今回、熊本県教育庁文化課によって、これらの人骨が再発掘された。

長崎大学医学部解剖学第二教室では、日本人の成り立ちやその形質変化を明らかにするために、西日本各地から出土する古人骨の蒐集とその形質人類学的研究を続けている。熊本県からは少なくない量の古人骨が出土しているが、その割には各時代ごとの特徴は明確にはなっておらず、九州での位置づけもはっきりしない。

今回再発掘された人骨は、頭蓋以外の保存状態が良好なものであり、本地域の古墳時代人骨についての貴重な資料となるものである。人類学的観察や計測を行い、他地域の資料などと比較し検討を行ったので、その結果を報告したい。

資　　料

人骨は一括されていたので、頭蓋や四肢骨をそれぞれ個体別に分けることはできなかった。従って番号は、各骨ごとにそれぞれ付けていった。人骨の残存部分と性別・年齢は、表１に示すとおりである。

再発掘で出土したのは、頭蓋片、下顎骨、肩甲骨片、橈骨、尺骨、大腿骨、寛骨片、大腿骨、脛骨、腓骨、踵骨片であった。このうち、頭蓋はおそらく２体分、下顎骨は３体分、上腕骨は６体分、橈骨は３体分、尺骨は２体分、大腿骨は７体分、脛骨は６体分、腓骨は２体分であった。また、上腕骨Ｆ、大腿骨Ｆおよび脛骨Ｆはいずれも成年骨で、おそらく同一個体と考えられる。

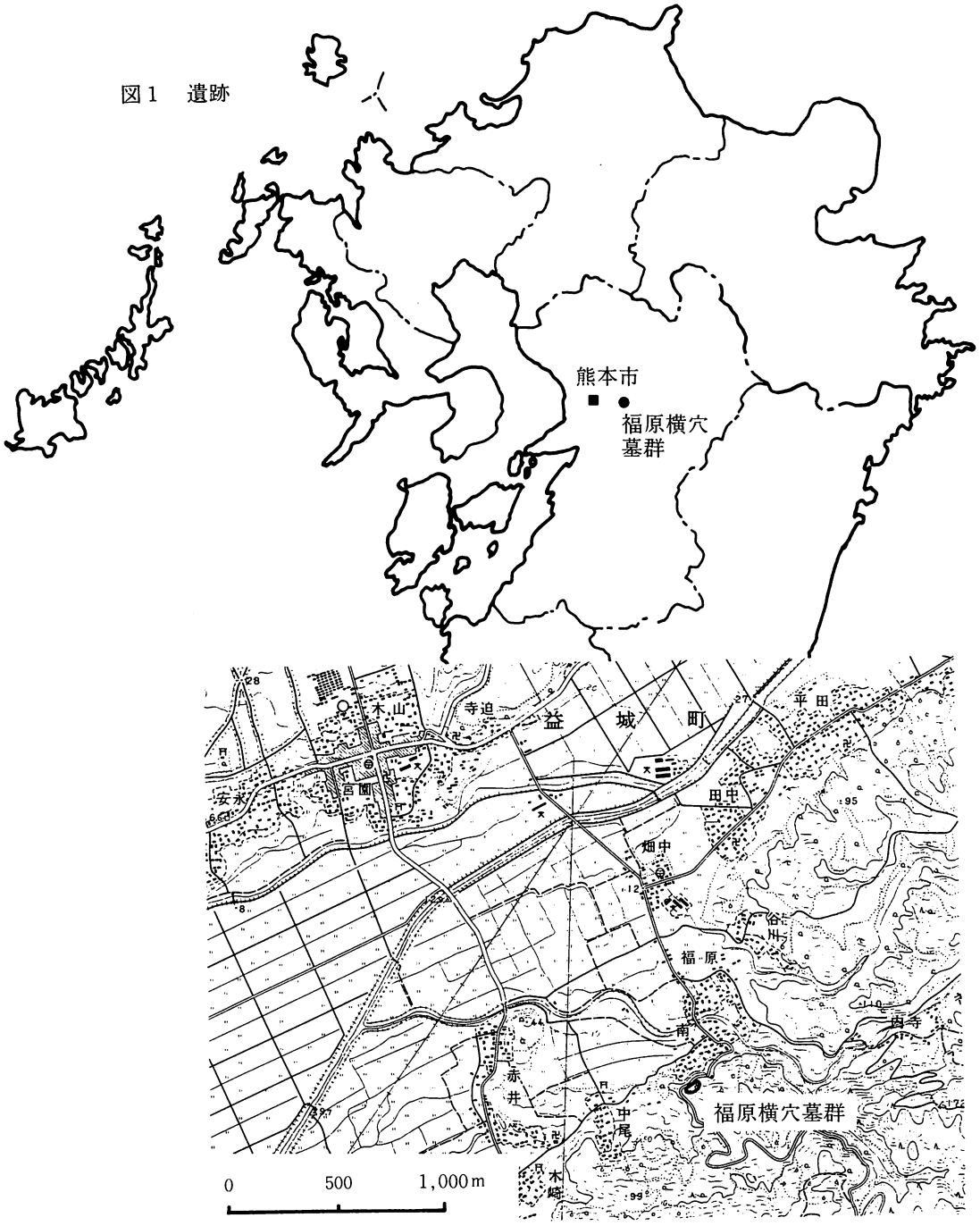
なお、この人骨群は、別稿で述べられているように、考古学的所見より古墳時代後期（６～７世紀）に属する人骨群である。

計測方法は、Martin-Saller (1957) によったが、脛骨の横径はオリビエの方法で計測した。

---

* Takayuki Matsushita, Tetsuaki Wakebe, Shoji Nakatani, Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University　　（長崎大学医学部解剖学第二教室）

図1　遺跡


熊本市
福原横穴
墓群
木山
寺迫
益
城
町
平田
安永
宮園
田中
畑中
福原
南
赤井
中尾
木崎
福原横穴墓群
0
500
1,000m

比較資料としては、熊本県の古墳人の例として、小路石棺(松下、他、1985)、古城横穴墓群(松下、他、1985)から出土した古墳時代人骨を、その他に、長崎県の古田A遺跡（松下、他、1985)、宮崎県の大萩地下式横穴（松下、1984)、山口県の朝田墳墓群第II地区の横穴墓(松下、1982、松下・他、1983)から出土した古墳時代人骨を用いた。また、参考までに西北九州近代・現代人の計測値なども比較表に載せた。

なお、成人骨については、松下・中谷が、成年骨および幼児骨については分部がそれぞれ分担した。

表1　人骨一覧

人骨番号	性別	年齢	備考
頭　蓋A	不明	不明	
頭　蓋B	不明	不明	
下顎骨A	男性	熟年	
下顎骨B	不明	不明	
下顎骨C	不明	不明	
上腕骨A	男性	不明	右側
上腕骨B	男性	不明	左側
上腕骨C	男性	不明	右側
上腕骨D	男性	不明	左側
上腕骨E	女性	不明	右側
上腕骨F	—	成年	左側
橈　骨A	男性	不明	右側
橈　骨B	男性	不明	右側
橈　骨C	女性	不明	左側
尺　骨A	男性	不明	右側
尺　骨B	男性	不明	左側
尺　骨C	女性	不明	左側

人骨番号	性別	年齢	備考
大腿骨A	男性	不明	両側
大腿骨B	男性	不明	両側
大腿骨C	男性	不明	右側
大腿骨D	男性	不明	左側
大腿骨E	女性	不明	右側
大腿骨F	—	成年	右側
大腿骨G	—	幼児	右側
脛　骨A	男性	不明	両側
脛　骨B	男性	不明	両側
脛　骨C	男性	不明	右側
脛　骨D	男性	不明	右側
脛　骨E	女性	不明	左側
脛　骨F	—	成年	左側
腓　骨A	男性	不明	右側
腓　骨B	男性	不明	左側

所　　見

1. 頭蓋

頭蓋の残存量は、四肢骨に比べると少ない。脳頭蓋が残存していたが、復元はできなかった。側頭骨も錐体部などが3個（右2個、左1個）残っていることから、おそらく2体分の頭蓋と推定した。外耳道骨腫は3個とも認められない。

2. 下顎骨

3体分が残存していた。1体分は下顎体が残存しており、これが最も保存状態の良い下顎骨である(下顎骨A)。あとの2体は下顎体の正中部が残存していたにすぎない。下顎骨Aの径は大きく、頑丈で、下顎角の外反も強そうである。このように下顎角の強い外反傾向は、同じ熊本県の八代市の清水1号古墳出土の下顎骨にも認められており、また、長崎県の小佐々町の古田A遺跡出土の古墳時代の下顎角も著しく外反していた。計測ができたのは下顎骨Aのみで、その計測値は、表2に示すとおりである。

また、歯も一部釘植していた。その残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと次のとおりである。

○ ● ○ P_2 ○ ○ ○ ○ | ○ ○ ○ P_1 P_2 ○ ／ ／

［／：不明(破損)
○：歯槽開存
●：歯槽閉鎖］

咬耗度はBrocaの3～4度である。また、風習的抜歯の痕跡は認められない。年令は歯の咬耗が著しいことから推測すれば、熟年と考えられる。なお、咬耗が強いので歯冠の計測は行わなかった。

表2　下顎骨計測値（mm）

		A 男性
67.	前下顎幅	48
69.	オトガイ高	31
69(1).	下顎体高(右)	32
	(左)	30

3. 上腕骨

上腕骨は6体分が残存していた。各上腕骨の計測値は表3に示すとおりである。

《上腕骨A～E》

三角筋粗面の観察はAとBのみが観察できたが、両者ともその発達は悪くはない。また、Bも骨体は扁平であるが、Aには扁平性は認められない。女性は、三角筋粗面の発達は悪く、骨体は扁平ではない。

男性上腕骨を他の資料と比較してみると、表4のとおり、AもBも骨体の周径は小路、古田A古墳人や大友弥生人と大差なく、大萩古墳人よりも大きい。しかし、骨体断面示数は、Aはいずれよりも大きく、Bはそれとは反対にいずれよりも小さく、比較的大友弥生人の平均値に近い。すなわち福原古墳人の上腕骨には扁平性が強いものと、扁平性が認められないものが存

在するのである。

表３　上腕骨計測値（mm）

		A 男性 右	B 男性 左	C 男性 右	D 男性 左	E 女性 右	F 成年 左
5.	中央最大径	22	25	—	—	21	19.3
6.	中央最小径	19	18	—	—	17	16.1
7.	骨体最小周	63	64	—	66	58	54.0
7(a).	中　央　周	69	73	—	—	62	57.0
12.	小　頭　幅	—	—	16	—	—	—
13.	滑　車　深	—	—	28	—	—	—
14.	尺骨頭窩幅	—	—	26	—	—	—
15.	尺骨頭窩深	—	—	12	—	—	—
6/5	骨体断面示数	86.36	72.00	—	—	80.95	83.42

表４　上腕骨計測値（男性、mm）

		A 男性 右	B 男性 左	小路 古墳人 右		古田A 古墳人 右		大　萩 古墳人 右		朝　田 古墳人 右		大　友 弥生人 右	
				n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
5.	中央最大径	22	25	1	25	1	23	3	22.33	3	23.00	37	24.46
6.	中央最小径	19	18	1	19	1	18	3	16.67	3	17.67	37	17.97
7.	骨体最小周	63	64	1	64	1	64	3	57.00	1	62	37	64.57
7(a).	中　央　周	69	73	1	72	1	69	3	65.33	3	68.00	35	71.00
6/5	骨体断面示数	86.36	72.00	1	76.00	1	78.26	3	74.71	3	76.84	37	73.60

一方、女性については、表５に示すように、同じ熊本県の小路古墳人や山口市の朝田古墳人よりは骨体の径は大きく、比較的大萩古墳人や大友弥生人に近い。骨体断面示数はどれよりも大きく、骨体の扁平性は認められない。

《上腕骨Ｆ》

骨体の径は著しく小さく、三角筋粗面の発達も悪いもので、未成人と考えられるので、古墳時代の各遺跡から出土した成年骨と比較してみた。

表5　上腕骨計測値（女性、mm）

		E 女性 右	小路 古墳人 右		大萩 古墳人 右		朝田 古墳人 右		大友 弥生人 右	
			n	M	n	M	n	M	n	M
5.	中央最大径	21	1	19	1	23	2	19.50	25	21.68
6.	中央最小径	17	1	14	1	15	2	15.00	25	15.48
7.	骨体最小周	58	1	51	1	58	2	53.00	20	57.65
7(a).	中　央　周	62	1	56	1	67	2	57.50	23	61.96
6/5	骨体断面示数	80.95	1	73.68	1	65.22	2	76.84	25	71.53

表6　上腕骨計測値（右、mm）

		福原 F （成年）	上の原 8号 （成年前半）	旭台 11－2 （成年前半）	大萩 37－1 男性 （18～19歳）	大萩 37－2 女性 （18～19歳）
5.	中央最大径	19.3(左)	18	17.6	23	23
6.	中央最小径	16.1(左)	12	13.2	16	15
7.	骨体最小周	54.0(左)	47	49.0	59	58
7(a).	中　央　周	57.0(左)	51	51.0	64	67
6/5	骨体断面示数	83.42(左)	66.67	75.0	69.57	65.22

表6に示しているように、中央周および最小周は、上の原8号（成年前半）、旭台11－2号（成年前半）よりも大きく、大萩37－1号（男性、18～19歳）および大萩37－2号（女性、18～19歳）よりも小さく、両者の中間の値を示している。従って、この上腕骨の年齢は、骨体の太さから成年期半ばのものと推測される。また、中央断面示数は各成年骨に比べるとかなり大きく、骨体の扁平性は全く認められない。

4. 橈骨

橈骨は3体分が残存していた。男性の骨体はやや大きいが、骨間縁の一部が鋭く突出するようはことはない。計測値は表7に示すとおりである。

5. 尺骨

尺骨は3体分で、男性の骨体はやや大きい。計測は男性のみが可能で、その計測値は表8に示すとおりである。

表7　橈骨計測値（mm）

		A 男性 右	B 男性 右	C 女性 左
3.	最小周	44	—	37
4.	骨体横径	17	16	14
4a.	骨体中央横径	16	16	14
5.	骨体矢状径	13	11	11
5a.	骨体中央矢状径	14	12	11
5(5).	骨体中央周	46	43	40
5/4	骨体断面示数	76.47	68.75	78.57
5a/4a	中央断面示数	87.50	75.00	78.57

表8　尺骨計測値（mm）

		A 男性 右	B 男性 左
11.	尺骨矢状径	14	—
12.	尺骨横径	16	—
S	中央最大径	14	14
L	中央最小径	16	17
C	中央周	49	52
11/12	骨体断面示数	87.50	—
S/L	中央断面示数	87.50	82.35

6. 大腿骨

大腿骨は6体分が残存していた。

《大腿骨A～E》

骨体はそれほど頑丈なものではないが、なかには粗線や骨体両側面の後方への発達が良好なものも認められ(A，B)、また、骨体上部が著しく扁平なものが存在する(A，C)。各計測値は表9に示しているとおりである。男性の平均値を算出し、右側について他の資料と比較してみた(表10)。まず、骨体中央部の太さをみてみると、本例の平均値は85.00mm(右側)で、これは朝田古墳人、小路古墳人と大差なく、古田A古墳人や大萩古墳人よりも大きい。すなわち、古人骨でみると、この大きさは大友弥生人が最も大きく、次いで小路、朝田古墳人の順に小さくなっており、本例は古墳時代人のなかでは大きい方に属している。次に骨体中央断面示数は104.53(右側)となり、朝田古墳人と大萩古墳人との中間値を示している。すなわち、この示数値も大友弥生人が最も大きく、次いで、大萩、福原、朝田古墳人と小さくなっていくが、熊本県の資料のうちここに掲げた小路、古城古墳人はいずれも小さく、100以下である。本例は平均値としては100をこえるが、4体分の大腿骨のうち、2体は粗線や骨体両側面の発達が良いが、残りの2体はこれと対照的な形態を呈している。また、上骨体断面示数は74.28(右側)となり、比較的小路、大萩古墳人に近い値である。この示数値は大友弥生人や朝田、古田A古墳人は大きく、これらの大腿骨骨体上部には扁平性は認められないかごく弱いものであるが、本例や大萩および小路古墳人には強い扁平性が認められるのである。

すなわち、男性大腿骨は、骨体の太さは古墳時代人としては大きい方で、骨体両側面の発達も比較的良好で、骨体上部の扁平性も強いものである。

表9　大腿骨主要計測値（mm）

		A 男性	B 男性	C 男性	D 男性	平均 男性 n	平均 男性 M	E 女性	F 成年	G 幼児
6.	骨体中央矢状径(右)	28	30	25	—	3	27.67	24	21.2	13.2
	(左)	29	31	—	25	3	28.33	—	—	—
7.	骨体中央横径 (右)	25	26	29	—	3	26.67	26	19.5	13.4
	(左)	27	26	—	30	3	27.67	—	—	—
8.	骨体中央周 (右)	84	87	84	—	3	85.00	77	63.0	42.0
	(左)	88	89	—	88	3	88.33	—	—	—
9.	骨体上横径 (右)	33	32	32	—	3	32.33	30	25.4	—
	(左)	—	32	—	—	1	32	—	—	—
10.	骨体上矢状径 (右)	23	26	23	—	3	24.00	22	18.1	—
	(左)	—	25	—	—	1	25	—	—	—
6/7	骨体中央断面示数(右)	112.00	115.38	86.21	—	3	104.53	92.31	108.72	98.51
	(左)	107.41	119.23	—	83.33	3	103.32	—	—	—
10/9	上骨体断面示数(右)	69.70	81.25	71.88	—	3	74.28	73.33	73.88	—
	(左)	—	78.13	—	—	1	78.13	—	—	—

表10　大腿骨計測値（男性、右、mm）

		福原 古墳人		小路 古墳人 (松下)		古城 古墳人 (松下、他)		古田A 古墳人 (松下、他)		大萩 古墳人 (松下、他)		朝田 古墳人 (松下、他)		大友 弥生人 (松下)		西北九州 近・現代人 (栄田)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
6.	骨体中央矢状径	3	27.67	1	26	1	26	1	26	6	27.67	6	27.17(左)	41	28.85	52	27.79
7.	骨体中央横径	3	26.67	1	28	1	31	1	26	6	25.33	6	26.67(左)	41	26.07	52	25.81
8.	骨体中央周	3	85.00	1	86		—	1	82	6	83.33	6	85.17(左)	41	87.22	52	83.46
9.	骨体上横径	3	32.33	1	32		—	1	31	2	30.50	6	30.17(左)	42	30.62	52	28.21
10.	骨体上矢状径	3	24.00	1	24		—	1	24	2	22.50	6	24.50(左)	42	24.83	52	27.02
6/7	骨体中央断面示数	3	104.53	1	92.86	1	83.87	1	100.00	6	109.40	6	102.03(左)	41	111.72	52	108.04
10/9	上骨体断面示数	3	74.28	1	75.00		—	1	77.42	2	73.76	6	81.29(左)	42	81.34	52	96.54

女性大腿骨は右側1例が計測できただけであるが、男性と同じように比較してみた（表11）。骨体中央周は77mmで、これは、小路古墳人よりも大きく、古城、大萩、朝田古墳人とほとんど大差ない。すなわち、骨体の太さは女性でも、大友弥生人が最も太く、小路を除く他の古墳人はほとんど変らないのである。骨体中央断面示数は92.31となり、比較的朝田古墳人の平均値に近い。この示数値は大友弥生人、大萩、古城古墳人が100をこえて大きく、朝田、小路、福原古墳人は100以下となり、小路古墳人が最も小さい値を示している。上骨体断面示数は73.33となり、骨体上部の扁平性は強く、比較資料のなかでは小路古墳人の値に近い。

すなわち、女性大腿骨は、骨体の大きさは他の古墳人と変らず、粗線や骨体両側面の発達は悪いが、骨体上部には強い扁平性が認められるのである。

表11　大腿骨計測値（女性、右、mm）

		福原 古墳人		小路 古墳人 (松下)		古城 古墳人 (松下、他)		大萩 古墳人 (松下、他)		朝田 古墳人 (松下、他)		大友 弥生人 (松下、他)		西北九州 近;現代人 (栄田)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
6.	骨体中央矢状径	1	24	1	21	1	25	4	24.75	7	24.00	30	26.00	30	24.23
7.	骨体中央横径	1	26	1	25	1	24	4	23.50	7	25.29	30	25.03	30	22.93
8.	骨体中央周	1	77	1	72	1	77	4	77.00	7	77.43	28	80.32	30	73.13
9.	骨体上横径	1	30	1	27	1	26	4	27.75	4	28.75	32	29.06	30	24.67
10.	骨体上矢状径	1	22	1	19	1	22	4	21.75	4	22.75	32	22.75	30	24.67
6/7	骨体中央断面示数	1	92.31	1	84.00	1	104.17	4	105.63	7	95.47	30	104.05	30	106.07
10/9	上骨体断面示数	1	73.33	1	70.37	1	84.62	4	78.59	4	79.15	32	78.42	30	100.74

《大腿骨F》

骨体は細長く、頑丈なものではなく、また、大転子、小転子はともに化骨していない。次に計測値を古墳時代の他の成年骨と比較してみた。表12に示しているように、中央周は大萩37－1号（男性、18～19歳）および大萩37－2号（女性、17～18歳）よりはかなり小さく、旭台3－3号（成年前半）および旭台11－2号（成年前半）よりもやや小さく、上の原8号（成年前半）と同じである。従って、この大腿骨の年齢は、骨体の太さから、成年前半と推定される。また、大萩37－1号および大萩37－2号の大転子、小転子が化骨を完了しているのに対して、この大腿骨のそれは未癒合であり、化骨の状態からも、成年前半のものと推測される。

表12　大腿骨主要計測値（mm）

		福原 F (成年)	上の原 8 (成年前半)	旭台 3－3 (成年前半)	旭台 11－2 (成年前半)	大萩 37－1 男性 (18～19歳)	大萩 37－2 女性 (18～19歳)
6.	骨体中央矢状径	21.2	22	23.3(左)	22.3	25	23
7.	骨体中央横径	19.5	18	19.9(左)	19.6	24	23
8.	骨体中央周	63.0	63	67.0(左)	66.5	78	76
9.	骨体上横径	25.4	24	—	—	30	27
10.	骨体上矢状径	18.1	18	—	—	22	22
6/7	骨体中央断面示数	108.72	122.22	117.09(左)	113.78	104.17	100.00
10/9	上骨体断面示数	73.88	75.00	—	—	73.33	81.48

《大腿骨G》

骨体中央部の断面はほぼ円形である。年齢を推定するために、古墳時代の幼児骨の資料がないので、弥生時代の幼小児骨の成績と比較してみた（表13)。骨体中央周は大友８号(2.5歳)よりは大きく、宮の本26号(３歳)、宮の本１号壺(４歳)とほぼ同じで、大友４号(７歳)および宇久松原II－３号(７歳)よりはかなり小さい。従って、骨体の太さからこの大腿骨の年齢は、個体差および時代差を考慮に入れたとしても、３～４歳程度の幼児骨と推定される。

表13　大腿骨主要計測値（mm）

		福原 G (幼児)	大友 8 (2.5歳)	宮の本 26 (３歳)	宮の本 １号壺 (４歳)	大友 4 (７歳)	宇久松原 II－３ (７歳)
6.	骨体中央矢状径	13.2	9.3	14	12	16.2	17.7
7.	骨体中央横径	13.4	11.2	13	14	13.8	14.6
8.	骨体中央周	42.0	34.0	43	42	47.5	50.5
6/7	骨体中央断面示数	98.51	83.04	107.69	85.71	11.39	121.23

7. 脛骨

《脛骨A～D》

骨体はそれほど大きいものではない。また、骨体がやや扁平なもの(Ｃ)もあるが、概して扁平性は認められない。計測は男性のみが可能で、その計測値は表14に示すとおりである。

男性の平均値を算出して、他の資料と比較してみた(表15)。骨体周や栄養孔位周は古田Ａや大萩古墳人よりは大きいが、小路古墳人より小さく、その他とはほとんど大差ない。また、中央断面示数は比較に用いた古人骨のいずれよりも大きく、骨体の扁平性は認められない。すなわち、比較に用いた古人骨のなかでは、骨体の太さは小路古墳人が最も大きく、次いで、大友弥生人、朝田古墳人が大きく、大萩、古田Ａ古墳人は最も小さく、本例の骨体の大きさは大友弥生人、朝田古墳人と同じぐらいの大きさであり、また、骨体の非扁平の程度は最も強いものである。

表14　脛骨計測値（mm）

			A 男性	B 男性	C 男性	D 男性	平均 男性 n	M	s	F 成年
8.	中央最大径	（右）	29	29	33	27	4	29.50	2.52	—
		（左）	29	30	—	—	2	29.50		—
8a.	栄養孔位最大径	（右）	33	33	—	35	3	33.67		—
		（左）	—	34	—	—	1	34		—
9.	中央横径	（右）	22	22	22	21	4	21.75	0.50	—
		（左）	22	21	—	—	2	21.50		—
9a.	栄養孔位横径	（右）	23	26	—	23	3	24.00		—
		（左）	—	24	—	—	1	24		—
10.	骨体周	（右）	80	80	84	80	4	81.00	2.00	—
		（左）	80	80	—	—	2	80.00		—
10a.	栄養孔位周	（右）	87	93	—	90	3	90.00		—
		（左）	—	93	—	—	1	93		—
10b.	最小周	（右）	74	74	78	75	4	75.25	1.89	62.0
		（左）	75	—	—	—	1	75		—
9/8	中央断面示数	（右）	75.86	75.86	66.67	77.78	4	74.04	4.99	—
		（左）	75.86	70.00	—	—	2	72.93		—
9a/8a	栄養孔位断面示数	（右）	69.70	78.79	—	65.71	3	71.40		—
		（左）	—	70.59	—	—	1	70.59		—

表15　脛骨計測値（男性、右、mm）

		福原 古墳人		小路 古墳人（松下）		古田A 古墳人（松下、他）		大萩 古墳人（松下、他）		朝田 古墳人（松下、他）		大友 弥生人（松下、他）		西北九州 近・現代人（久松）	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
8.	中央最大径	4	29.50	1	30	1	29	4	29.00	2	29.50	35	31.26	72	28.52
8a.	栄養孔位最大径	3	33.67		—	1	30	3	32.00	2	34.00	30	34.63	72	31.02
9.	中央横径	4	21.75	1	20	1	19	4	20.25	2	21.50	38	21.29	72	21.55
9a.	栄養孔位横径	3	24.00		—	1	22	3	22.23	2	24.00	32	23.22	72	24.71
10.	骨体周	4	81.00	1	85	1	76	4	78.25	2	80.00	34	82.85	72	80.45
10a.	栄養孔位周	3	90.00		—	1	84	3	87.33	2	92.00	30	92.00	72	89.10
10b.	最小周	4	75.25	1	80	1	71	3	74.00	2	75.00	34	75.35	72	71.64
9/8	中央断面示数	4	74.04	1	66.67	1	65.52	4	69.94	2	72.81	34	68.03	72	75.76
9a/8a	栄養孔位断面示数	3	71.40		—	1	73.33	3	69.96	2	70.48	30	67.16	72	79.81

《脛骨F》

骨体遠位部が残存しており、最小周のみが計測可能で、60mm(左)である。この計測値は成人骨と比較するとかなり小さい。古墳時代の各成年骨と比較してみると、表16に示すとおり、大萩37－1号（男性、18～19歳）よりはかなり小さく、上の原8号（成年前半）よりは大きく、旭台3－3号（成年前半）とほぼ同じである。従って、この脛骨の年令は、骨体の大きさから成年期前半のものと推測される。

表16　脛骨計測値（mm）

	福原 F （成年）	上の原 8 （成年前半）	旭　台 3－3 （成年前半）	大　萩 37－1 男性 （18～19歳）
10b.　最　小　周	62.0(左)	54	62.5	72

8．腓骨

2本分が残存していた。計測はできないが、骨体はやや大きく、稜の発達も良好なものである。

総　　括

熊本県上益城郡益城町大字福原にある横穴墓群のうち数基が、大正年間に破壊され、出土した人骨は再埋葬されたが、今回、熊本県教育庁文化課によって、これらの人骨が再発掘された。頭蓋の保存状態は悪かったが、四肢骨は比較的良く残存していたので、人類学的観察や計測を行った。その結果を要約すれば、次のとおりである。

1．残存していたのは頭蓋片、下顎骨、肩甲骨片、橈骨、尺骨、大腿骨、寛骨片、大腿骨、脛骨、腓骨、踵骨片であった。今回出土した人骨の予想される最大体数は大腿骨の数から7体である。

2．この人骨群の所属時代は、古墳時代後期（6～7世紀）と推定されている。

3．下顎骨のなかには、下顎角の外反が強そうなものが認められた。

4．男性上腕骨の骨体はやや大きく、骨体が扁平なものとそうでないものとが存在する。女性骨体もやや大きいが、扁平性は認められない。

5．男性大腿骨の骨体もやや大きいが、粗線や骨体両側面の発達については、良好なものとそ

うでないものが存在する。また、骨体上部は扁平である。女性の骨体の大きさは他の古墳人と大差ないものであるが、骨体は著しく扁平である。

6．男性脛骨の骨体の大きさは、古墳時代人骨としては普通の大きさで、骨体には扁平性は認められない。

7．この人骨群のなかには、成年期前半のもの（上腕骨、大腿骨、脛骨）と幼児（3～4歳）のもの（大腿骨）が認められた。

8．九州では、弥生時代人骨の研究が他の時代の人骨に比べたら比較的進んでおり、地域差を含めて、その特徴が次第に明らかになりつつある。しかし、古墳時代人骨の研究は、その出土量のわりには遅れており、私達も南九州での特徴の一部を把握しているにすぎない。

今回再発掘された人骨は、頭蓋の保存状態が著しく悪く、頭型や顔面の形態などを知ることはできなかったが、下顎角の外反傾向が強そうで、このような傾向が同じ熊本県八代市の清水1号古墳出土人骨にも認められていることは注意しておきたい。また、四肢骨では、大腿骨上部が著しく扁平であり、また、脛骨の非扁平化の程度が古墳時代人骨にしては強いものであった。

《擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた、熊本県教育庁文化課の諸先生方ならびに人骨研究に関してご指導いただいた内藤芳篤教授に感謝致します。》

参考文献

1．栄田和行、1967：西北九州人大腿骨の人類学的研究。長崎医学会雑誌、42：313－324.

2．久松　巌、1969：西北九州人脛骨の人類学的研究。長崎医学会雑誌、44：718－728.

3．北条暉幸、1983：熊本県玉名郡菊水町江田大久保船型石棺人骨(会)。人類学雑誌、91：235.

4．Martin-Saller, 1957：Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. Gustav Fisher Verlag, Stuttugart：429-597.

5．松下孝幸、1981：大友遺跡出土の弥生時代人骨。大友遺跡（佐賀県呼子町文化財調査報告書1）：223－253.

6．松下孝幸、1982：山口県朝田墳墓群第II地区出土の人骨。朝田墳墓群　V　（山口県埋蔵文化財調査報告第64集）：179－206.

7．松下孝幸、他、1983：山口県山口市朝田墳墓群第II地区出土の人骨―総括篇―。朝田墳墓群VI（山口県埋蔵文化財調査報告第69集）：219－242.

8．松下孝幸、1984：宮崎県野尻町大萩地下式横穴出土の古墳時代人骨。宮崎県文化財調査報告書、第27集：53－111.

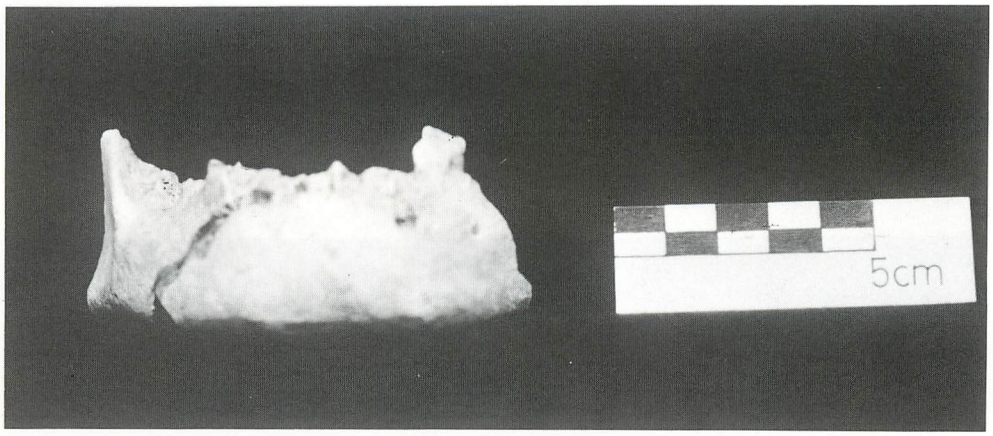
9．松下孝幸、分部哲秋、中谷昭二、1985：長崎県小佐々町古田A遺跡出土の古墳時代人骨。小佐々町文化財調査報告書第1集

10．松下孝幸、分部哲秋、中谷昭二、1985：熊本市古城横穴群出土の古墳時代人骨。熊本県文化財調査報告、

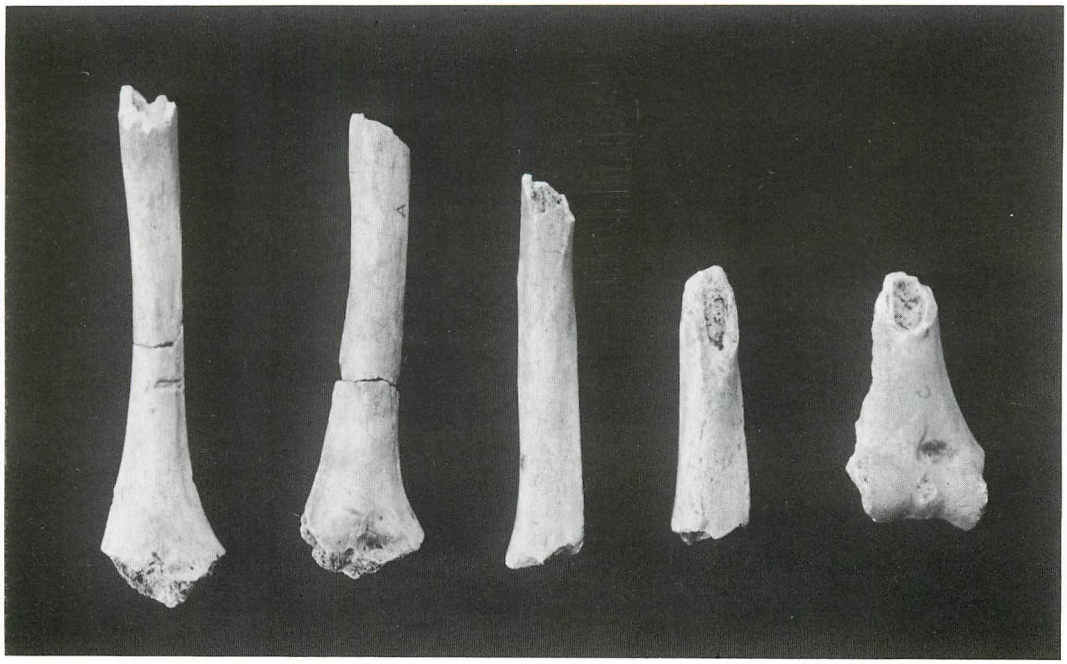
第74集
11. 松下孝幸、1985：玉名市小路石棺出土の古墳時代人骨。玉名市文化財調査報告、第6集
12. 分部哲秋、1981：宮の本遺跡出土の幼小児骨。宮の本遺跡（佐世保市埋蔵文化財調査報告書）：110－113, 119, 147.
13. 分部哲秋、1981：宮崎県上の原地下式古墳出土の成年骨。上の原地下式古墳群発掘調査（宮崎県文化財調査報告書24）：135－140.
14. 分部哲秋、1981：佐賀県大友遺跡出土の幼小児骨。大友遺跡（佐賀県呼子町文化財調査報告書1）：254－264.
15. 分部哲秋、1983：宮崎県高原町旭台地下式横穴出土の古墳時代小児・成年骨。宮崎県文化財調査報告書、26：112－128.
16. 分部哲秋、1983：長崎県宇久松原遺跡出土の弥生時代幼小児骨。長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅵ（長崎県文化財調査報告66）：124－134.
17. 分部哲秋、1984：宮崎県野尻町大萩地下式横穴出土の古墳時代小児・成年骨。宮崎県文化財調査報告書、第27集：113－131.

図　　版（人骨）

下顎骨Ａ（上面）

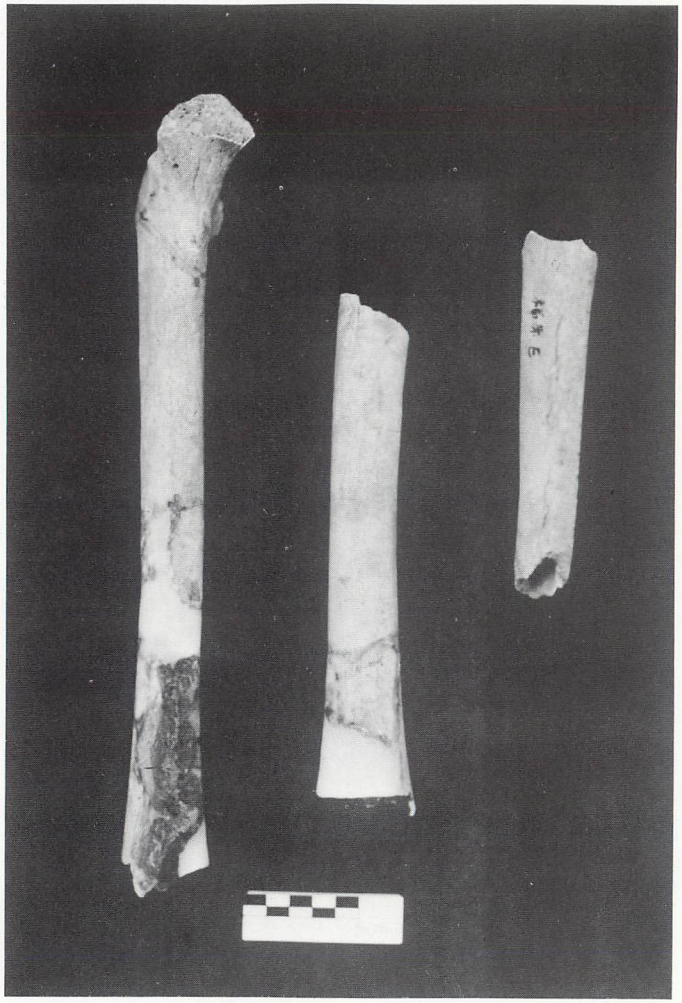


下顎骨Ａ（正面）

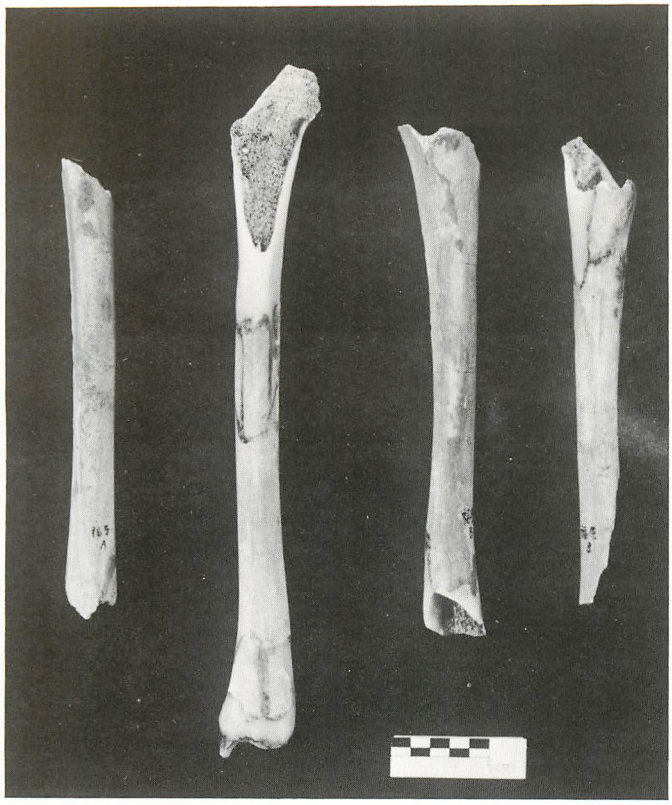


上腕骨（Ａ・Ｂ・Ｅ・Ｄ・Ｃ）

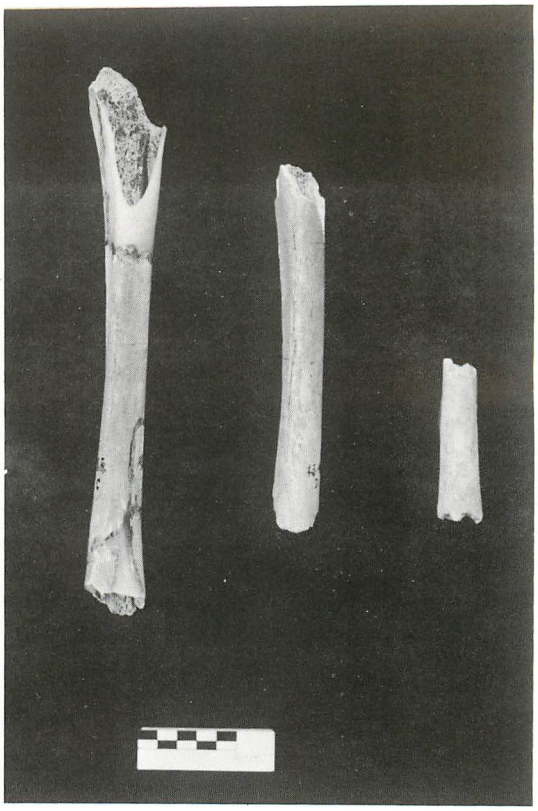
大腿骨（A・B）



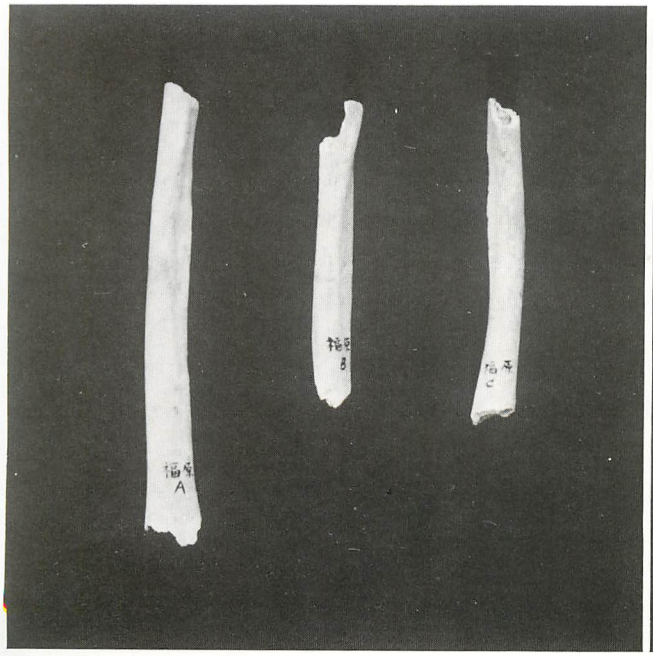
大腿骨（C・D・E）



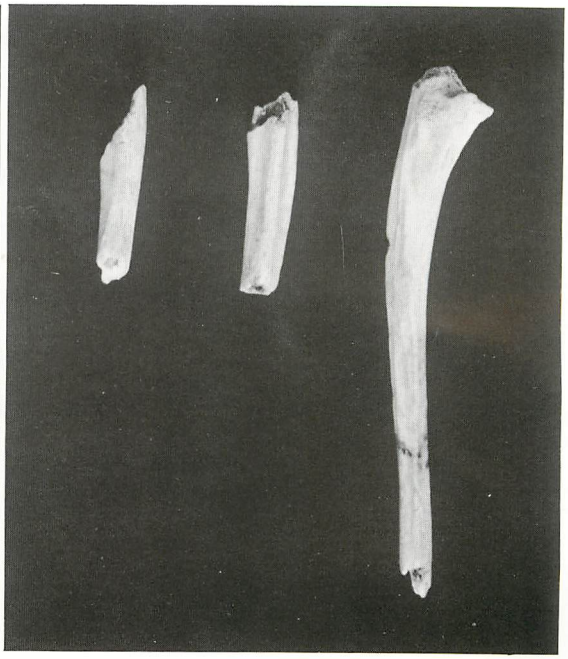
脛骨（A・B）



脛骨（C・D・E）



橈骨（A・B・C）



尺骨（C・B・A）

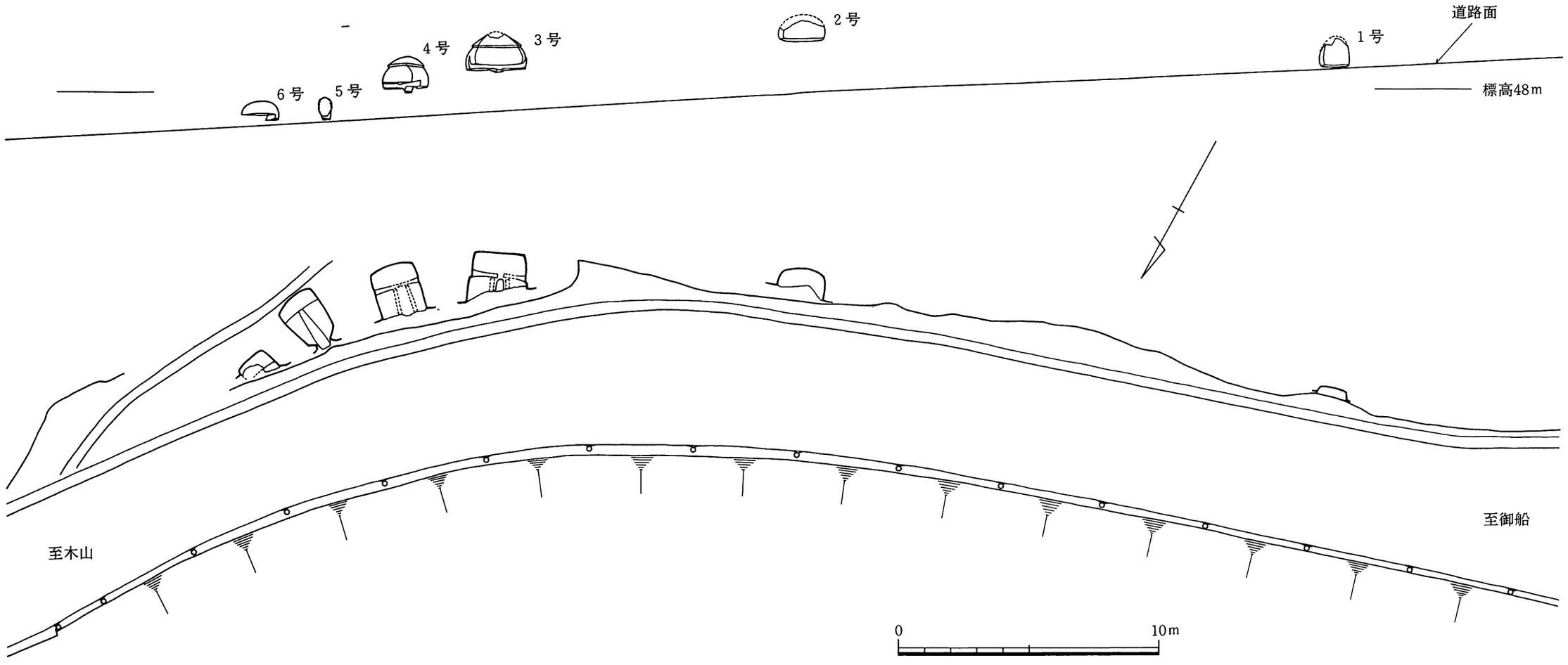
熊本県文化財調査報告　第77集

福 原 横 穴 墓 群

昭和60年３月31日

編集
発行　熊 本 県 教 育 委 員 会
〒862 熊本市水前寺６丁目18番１号

印刷　コ ロ ニ ー 印 刷
〒860 熊本市二本木３丁目12番37号



別図　福原横穴墓群配置図

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 77 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：福原横穴墓群
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日